
悪神【悪を称する正義】

荒木新二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪神【悪を称する正義】

【Nコード】

N3032U

【作者名】

荒木新一

【あらすじ】

これは、

とある少年が無理やり今までの人生や事実や常識を打ち碎かれ、苦悩や信頼の中で自らの命や意志を守る為に戦う、

『神闘記物語』

日本の片田舎のとある町に住み、超有名高校に通う、落ちこぼれかつかなり有名な不良の高校一年生の隼火蓮。

いつものように退屈な生活を送っていた彼はある日、たまたま乗り合わせていたバスでの殺害事件に巻き込まれた。

バスの乗客達が無惨に殺されていく中、その犯人の宣告により、彼の人生が大きく変わった！

何が正しいのか悪いか……

どう自らを貫くか……

苦悩や信頼の中で、少年は何を手に入れるのか……

今、隼火蓮の壮大な闘いが始まる！

（ 1話から書き直すことにしました。）

一章〈守護者との出会い〉

『キミは選ばれたんだ!』

…何に？

『神の力を手にする権利を!』

…どうして？

『それは知らない』

…なんだそりゃ？

『イイからきなさい!』

…ハイハイ

…ついて行くからそんなもの向けるな…

…どうして俺はこんな所でこんなバカな事を言われてんだらう？

…こんな、『バス内の傷害事件の現場』で

…その事件の首謀者であるこのチビなポニテの少女に
…どうしてこんな『血に染まった長ドス』を向けられ
…こんなくだらない事を言われてんだらう？

…まあ、物事には順序が必要だ

冷静になろう
だから今から六時間前。

ようするに俺の起床から物事を思い出してみよう。

それくらいは許してくれるだろ

おちびさん

「ちっ また遅刻かよ……」

そう目覚まし時計に理不尽な怒りを起こしつつ、俺は布団から這い出る

あゝそうそう、

自己紹介しておこう。

俺はオポロビレン隴火蓮

身長159

私立貴秀高校一年

家族は『父・母・姉妹…じいちゃん』だ

…とまあこんなかんじかな？

じゃあ、自己紹介は置いて

俺はちんたらと台所に向かう。

時間は10時過ぎ。

両親は共働きで、姉妹は大学と小学校にそれぞれ出発。

…じいちゃんは…

知らない。

ようするに俺1人だ。

…まあ、別にいいけどね

俺は軽く朝食をとって、ゆっくりと学校に向かった

学校に着くと、いつも通りにクラスメートがコソコソ話をする。

ちなみに、ここ

『私立貴秀高校』は名前で分かるように、かなりの進学校だ。

ちなみに俺は、かなり頭が悪い

それに加えて、かなりの不真面目さんである。

よくこの高校には入れたなと思うのは今でもときどき思うが…それは置いて、

こんな高校だから勉強について行けないし、周りはクソ真面目な奴らばっか。

入学して2ヶ月がたつが、
1ヶ月でういてしまった…

周りの奴らは俺の授業態度が気に食わないからだろう、いつもコソコソと

『またきたよ』『何でくるんだよ…』

『早くこの高校からでていけっつーの』

…なんて会話が聞こえる

『場違いなのは知ってるっつーの』

俺はそう心の中で毒づいて、自分の机に向かった。

そして、悪魔のような時間がきた。

… 2 バスから始まる物語

「しかし、今日もめちゃくちゃ怒られたな」

俺はバスに揺られながら溜め息を吐いた

今日は授業が珍しく五時限で終わって、あんな学校にはあまりいたくないから俺は全力ダッシュで3時45分のバスに駆け込み乗車したのだ。

「授業寝たぐらいであんなにキレとは…」

今日の授業は5つ中5つ、

ようは全部寝て、全授業の課題を忘れた俺は、怒られた挙げ句

「放課後、職員室に来るように！」

と言われたのだが、面倒くさいのでボイコットしてきたのだった。

8

その日

俺は、ボイコットしてきた事を悔やむだろう…

なんせ、あんな事が起こるとは思わなかったからな…

「そろそろ着くかな？」

俺はバスを下りる準備をする

すると、

「みーつーけた！」

と、そんな愛らしい声が窓の外から聞こえた。

…ん？

ちよつと待て！？

窓の外からって！？

ありえねーだろ！？

窓の方をとっさに見たが…

何もいなかった。

「ふー ビックリした〜」

寿命が一年縮まったような感覚だったな〜

はっは〜

普通に考えてないよな〜

疲れてんだな、俺。

じいちゃんのスパルタなアレの教育で疲れてんだな！

よし、

今日は家に帰ったら寝よう！

っと甘い考えを結論付けていた所に、

「キヤアアアアア！！」

っという甲高い叫び声が、背後から鳴り響いた。

「…何だ？」

俺は持ち前の冷静さを発揮させながら、いつでも走れる体勢になり
つつ

素早く振り返った。

ソコにいたのは…

「ヤッホー！」

なんて可愛い声でこっちを楽しそうに見てる女の子がいた

「……………」

俺は、今まで自分の冷静さを誇りに思っていたが、
今は逆に気持ち悪く思った。

だって、そうだろ？

女の子が刃物で女性を串刺しにして、返り血を大量に浴びてる顔で、
こっちに笑顔を向けてるのに、

自我を失わないんだぜ…

「…後でじいちゃんに説教入れとくか…！」
なんて、小声で冗談かましてると。

「ふふふ」

と少女が微笑んだ次の瞬間！

「！！！」

勢いよく女性から刃物を抜き取ると、
今度はこっちに向かって走ってきた！

『速い！』

そう思いつつ、俺も女の子に向かって走り出した！

だが、

「君じゃないんだよね〜」

なんていいつつ、俺の頭の上をジャンプした。

…俺、そんなに背が小さいのか…。

なんて一瞬油断してたら、

「ギヤアアアア！！！」

「うわぁ！！！」

「助けて！！！」

何て声がして、素早く振り返ると、

そこには鮮血で染まったバスの中を背景に、

みんな血溜まりに倒れていた！！

「ウフフ」

女の子は

先ほどと同じ、可愛い声を発しながら

自分の斬り倒した人々を、

「グサツ、グサツ」つとやな効果音をだしつつ

ひたすら突いたり抜いたり、刺したり引いたりしている。

まるで、ジャガイモをつぶす子供のごとく…

俺はそれを黙ってみているしかない。

下手に突撃しても、やられるのがオチだしな…

俺はひとまず、その女の子を観察する事にした。

まあ、戦闘時の基本だしな…

えーつと

身長は…140未満だな

顔は…若干垂れ目で幼さを残す顔だな

まるで、らすたのこ たみたいだ

髪は淡い水色のポニーテールで、解いたら太ももまでいきそうだ。

雰囲気は…殺気じゃなく、和みを感じる

何故か知らないが、心が落ち着く感じの雰囲気だな

…じゃあ、

大体観察も終わったし

そろそろやるか！

俺は全力ダッシュでその女の子に近づく。

「！！！」

女の子は、油断してたのか、はたまた俺の速さに驚いたのか、一瞬で距離を詰められた

そして俺は、女の子の鳩尾に鋭い一撃が後少しで入るまでのところで寸止めた。

…いや、されたのだ。

先ほど斬られた人々によつて！

俺は反射的に、掴まれた右腕に引っ付く男を蹴りつつ後方にバクテ
ンした。

だが運悪く、バクテン最中にバスが揺れ、思いっきり顔面から墜ち
てしまった。

「いつてええええええ！！！」

マジで悲鳴を上げる俺が見たのは、長ドス片手にハンドルを操作し
ている女の子がいた。

うん。

ニヤニヤしてるな…

「テメエ、何すんだコラ!!!」
と怒鳴ったが、

不意に後ろに気配をかんじた

いや、

ただの気配じゃない!

これは…

『殺気!!!』

後ろ蹴りをかましつつ背後に振り返ると、

そこには斬られた人々がゾンビみたいにごつちに近付いてきた…!

「何だよ、これ?」

あくまでまだ冷静な俺の頭が…いや、
体が伝えてくる…

『逃げろ!!!』と!
すると、

驚く事に、女の子がまた俺に向かって走り出した!

そして、

「君はやっぱり選ばれし存在ってやつなんだね」
何てウインクをしつつ、俺の横を通り過ぎ、

そして

「邪魔しないでね」

なんていいつつ、

女の子は、さっきの乗客を今度は一刀両断した。

…うわーお、脳が見え！

内臓が大公開！

見てて不快なんてレベルじゃねーよ…

俺はあまりの衝撃的な光景から立ち尽くしていた。

しかし、そんな俺に構わず、

女の子は次々と乗客達を斬り殺していく。

ある人は首を飛ばされ…

ある人は胴体を真っ二つに…

またある人は袈裟懸け斬りに…

ドンドンとスゴイペースで死体が再び積み上がっていく。

そして、全ての乗客を斬り殺した後、

やつは、

こういいはなったのだった…「君は選ばれたんだ…！」

…この一言により、俺の退屈な日々は
闘いと生きていくことの辛さの日に変わってしまったのだ。

だが、俺は諦めずに語ってゆこう

この俺の…

『悪神』の物語を…

俺はその女の子について行く。

女の子は千鳥足でヨタヨタと危なっかしく、しかし何事もなく歩く。

「フラフラ歩くとアブねーぞ。」

そう注意すると、

「ロープログラミング！そんな事心配しなくてイイよ〜」

何てニコニコ顔で返事をした。

…しかし、ロープログラミングって

ノープロブレムだろーが…

何て思っていると、女の子はその酔っ払いを想像させる歩き方のスピードを落とし、右を向いて足を止めた。

「ここだよ〜」

着いた場所は廃ビルだった。

うーん、

大丈夫か、この建物…

俺、結構潔癖症だからねー

こういう建物は…

何て思ってたら、

「じゃあ、レッツゴー！」なんていいながらフツウにはいっていきやがった…

「…ハイハイ、行けばいいんだろ。」

そう言っつて、俺もはいつていった。

「あれ？ 中は結構キレイだな…」

入った廃ビルの中は、廃ビルらしくあちこちが傷だらけだったが、ホコリが1つも落ちておらず、毎日清掃を欠かしていないような風景だった。

うーん

俺はてつきり、床は抜け落ちて空き缶やらゴミやらのエベレストが積み上がっているとはかり思っていたからちよつと残念だ。

「こつちこつち」

階段であの女の子が手を振っている。

どうやらまだ上に行くらしい。

先程、エレベーター（元）を調べたが、どうやら10回建てらしい。ムダにデカイ廃ビルだな…

階段を女の子の後ろ姿について行くが、いかんせん、千鳥足のため見てて冷や冷やする。

…アルコールでも入ってんじゃねーか？

だったら秒速でサツ呼ぶぞ！

何て思ってたなら、遂に10回まで着ていた。

「こつちなさ」

女の子は…

てかいちいち女の子ってゆうのもめんどくなってきたな。

「オイ お前、名前は？」

なんて聞くと、

「まあまあ、後でのオツ楽しみ」

なんてぬかしやがった。

「テメエ、ふざけてんの『スチャッ』…」

文句を言おうとしたが、例の長ドスを頸動脈スレスレにおかれて黙る。

そう、

この長ドスはい先ほどの傷害事件のときに使用された殺人道具。

「…テメエ！」

俺は、バス内でのことを思い出して怒鳴ろうとしたら、

「…シー」

女の子は唇に人差し指をくつつけて、『静かにっ』のジェスチャーをする。

『余り大きな声出さないでくれるかな？ 奴らに気づかれるかもしれないから…ね』

『…奴ら？ 奴らって誰だ？』

つられて小声で問うと、

『詳しくはアソコではなぞ。』

と、一番奥の部屋を指差した。

それから、女の子はフツウの態度に戻り、その部屋へ向かう。

「…部屋に入ったら覚えてるよ！」

俺はそう毒づいて女の子について行った。

「いらつしゃい。あたしの部屋へようこそ。」

俺が入った部屋は、もはや一般的な家庭の部屋と言っても過言じゃないくらい、あちこちに家具やガーデンングの花、はたまたムダにデカイ液晶テレビまで置かれてあった。

「…ええ」

フツウに驚いてしまった。

イヤ、だってそうだから。

何でこんなあちこちズタボロな廃ビルによう、冷蔵庫やテーブルにソファーやら、ましてはメチャクチャデカイ液晶テレビがあるんだよ…。

下手すりゃウチんちより豪華だぞ…

廃ビルのクセに…！！

「ありえねー…」

ちよつとばかり悲しくなってしまった俺に気をかまわず女の子は会社の社長が座りそうな高級感溢れるイス（うらやましい…）にドガつと座り、遂に語り始めた…

「やあやあ、皆さんごきげんよう!!! て、2人しかいないか
あつはっは〜!」…ウザ
イイから取り敢えず名乗れよ、コラ!
そんな俺の心が通じたのか、女の子は名乗った。
「そうそう、あたしの名前言ってなかった…かな? まあいつか
あたしの名前は、サリア・リフファープ・哀奈。 サリーて呼ぶ
がよいさ〜 なんちゃって
と名乗った。

「なんで名前が2つあるんだ?」
「コッチの世界では名前つばいのがふたつあるんだよ、ちなみに名前は真ん中のやつだよ〜」

「よりによって真ん中かい!! 前の二つは何だ!? 苗字か!?
それともニツクネームか!?」
ちよつとばかり驚いたな…

…ん?

『コッチの世界では』って、まさか!

「お前まさか、異世界人なのか!?!」

「そうだよ?」

「即答かいイイイイ!!」

イヤ、フツウはもうちよつと悩むよな!

なのにお前は どうしてそんなに簡単に言うんだよ!!!

言いよどめよ!!!

「は〜 まあイイか、 めんどいし、リファ〜って呼んでイイか?」

一応、反応を伺いながら聞くと、

「うーん、あたし的には一番最初の方がいいんだけど…まあいつか

うん、別にいいよ〜」

なんて軽く了承してくれた。

…本当に軽いな〜

まあ、こういう性格は嫌いじゃねーがな。

「んじゃ、仕切り直しましょう」 念の為に確認するけど、今から言うことは全部…事実だよ…」

リファーは急に声のトーンを下げて、表情も若干キツイ顔つきになった。

「コワいんだけど、さっきのギャップも追加して余計に…」

「単刀直入に言うよ、」

君は神様にならなきゃいけないんだ。」

「…？ 何で？」

俺はまた持ち前の冷静さで聞いてみた。

「それは知らない。」

ただ、フツウはなりたくてもなれないし、なりたくなくてもならな
いといけないんだ…」

リファーは沈痛そうな顔で告白した。

「…何でお前が落ち込んだよ？」

そしてお前は何者何だ？

バスの連中をどうして殺した？

順番に従ってゆっくり、詳しく話せ。」

俺はそう告げる。

「…順番を変えて話していいかな…？」 上目づかいで許可を求める
リファー。

「…ゆっくり、詳しく話すならいいぜ。」

近くの食卓用テーブルの上に座り見下した視線を送る俺。

…これぐらいは許してくれ

「ありがとう…」

とりあえず、バスの乗客から話すね。」

「いきなり最後からか…」

選択ミスったか…

バス内傷害事件もとい、殺人事件が一番大切だと思ったのに…

だって人が死んでるんだぜ…

なんて甘い考えは2秒後に木っ端微塵に粉碎された。

「あの人は人間じゃないんだよ。」

「…何？」

んなバナナ！？

心の中でそう呟いた。

「正格には元人間、

今のは『獄返人』

地獄に落ちた人間を現実に召喚したもの…いわば『ゾンビ』だよ。」

有り得んわー！！

フツウはこうツツコムだろう…

しかし俺は気になった事をストレートに聞いてみた。

「…誰が召喚したんだ？」そう聞くと、リファアは少し悩んで、話した。

「…神様だよ、別の…ね…」

……………えっ？

「神が何で俺を殺そうとする？」

バス内で感じた気は…殺気だった。

「神だから殺そうとしたんだよ。」

君はものすごい神になることを知っていたから。」

「…どんな神なんだ？」

そう聞いた俺の声は…微かに震えていた気がする。

「今、確かめるね。」

そのためにきてもらったんだもの。」

そう言うと、俺のすぐ近くまでよってきて、手を鳩尾辺りに置く。

「結構、痛いけど我慢してね。」

小声で言うと、手のひらが、水色に輝いた。

そして…

「…ガッ、アアッ、アアアアアアアア！！」

鳩尾辺り辺りから雷を喰らったのような痛みが全身を襲った！！

脳天から足のつま先まで痛みが体を支配する！

「ツツツツツツッ！！！」

悲鳴を上げないように努力しながら痛みに耐えると、不意に体が軽くなった。

「…信じられない！！！」

リファアが驚いている。

「はあ、はあ、はあ…結果ッ、は？」

結果が気になっていたので、呼吸がおぼつないまま聞くと、

「結果は悪いよ、

二重の意味でね…」

「ジョーク入れなくてイイから早く言ってくれ」

…この時、俺はもう少しぐらいはジョークに付き合っても良かったと思った。

「…君の神名は『悪神』」

名前の通り、悪さの神様だよ…。」

…この一言は、俺の今までの一生懸命さや善行と言っ
いや、

俺の人生そのものを否定しているような気がした…

… 3 守護者（後書き）

俺はどちらかと言うと、見る専なんで、
気まぐれでたまにしか更新しません。

もし、見ている人がいれば、感想を書いてください。

執筆をなるべく早めるよう努力します。

… 4 人と神

俺は今、学校にいる。

今日はちゃんと起きて自転車で学校に向かった。

まあ、ハッキリ言うと、バスに乗りたくなかったただけなのだが…

「昨日のは無いだろ…」

ため息を漏らしながら頬杖をつく。

今日ぐらいは平和に過ごしたいぜ…

昨日の夜

「悪神…」

俺はあまりの衝撃でぼんやりしていた。

「悪神はその名の通り、『悪しき神』。人を殺したり、人に悪意を
はびこらせたりする…いわば魔王が神様として祭られてる感じかな
？」

リファアはそう説明した。

…悪しき神…

何で俺が？

悪しきって…

じゃあ俺は何の為に鍛えてきたんだよ……！！！！
……じいちゃん……教えてくれよ……！！

「とにかく、神になる儀式はまだいいよ。
今はとりあえず、残り少ない学校生活でも楽しんだらう」
「だなんて、いつもの緩い言葉で言った。」

「……ああん」

残り少ない学校生活を楽しめだろ……！！

「オイ、テメー何か勘違いしてないか？」
「いつの間にか、俺の怒りは一気にMAXになっていた。」

「お前は自分が神になれっつていわれてなれるのか？
今すぐとは言わないって……ようは必ずなんだろ。」

人間はなぐ、そうそう人間をやめたがらねーんだよ！」

「……え、違う！私は……」

リファアは目を見開いて驚いていたが、何か弁解しようとし初めた。

それにイラついた俺は、

「違う？何が違うんだよ！お前は俺を神だかなんだかにして、人間
を止めさせようとしてんじゃねーか！」

「……」

何も言えないリファア。

それをいいことに、俺は思ったことを隠さないうでストレートに言う。

「しかも『悪神』だあ？」

『悪しき神』になれっつて言っつてんのか？

ふざけんな……！！

ただでさえ、じいちゃんに、正義の精神と悪しき者を倒す為の肉体を子どもの頃から叩き込まれてたのに、悪しき神になんかなるか！！
第一、俺はあんな教育されなくても、おれは悪が大嫌いなんだよ！！」
「待つて、あたしの話を聞いて！」
怒鳴り散らすに反抗するかのように近づくりファア。
「分かる訳ねーよなー！！異世界人のお前なんかに、平和に暮らしてた地球人の俺の気持ちなんか分かんねーよなー！」
俺は言葉でリファアを止める。

…リファアの目尻に涙が溜まっていた。
…が、俺は続ける。

徹底的にやらなきゃ、また入り込まれる。

「残り少ない学校生活か…
確かに学校はあまり好きじゃねーよ。
人を嘲笑うことしかできないクズがわんさかいてよー。
…でもなあ」

俺は言う。

「『悪神』何てクソみてーなもんになるより、コッチの方が一万倍マシだああああ！！！！」俺がここ一番の声でどなると、

「…うわわわわわん！！」

リファアは遂に泣き出して、部屋から飛び出していった。

そして、

俺は結局リファアが異世界人で、俺が神候補であり、命を狙われてるぐらいしか分からず（十分か？）

廃ビルから家に帰ってさっさと寝たのだった。

そして現在にいたる。

昼休み、コンビニで買ったアンパンを食いながら教科書を片づけていると、

「隴火君…一緒に食べていいかな…？」

なんて弱々しい声が聞こえた。

「朝麻貴、お前は本当に周りの空気が読めないな…」
俺は素直に呆れた。

あさまきみや
朝麻貴都

クラスメートで、内気で病状で運動能力が皆無で声も小さく、空気が読めない（こんなに悪口思いつきなんて…俺、こいつ嫌いなのか？）奴だが、

成績は学年2位で先生方の信頼は生徒1、
何よりも、かなりの美人（大和撫子系）である。

「私は周りなんて気にしない。…だってみんな私のこと嫌いだから…」

「また自己卑下かよ…いい加減、うぜーよ。」

「…隴火君、言い方キツイ…」

「ああ、悪い。つい癖だな…」

「…隴火君、昨日何かあったね？」

…忘れてた。

コイツ異様に鋭いんだった。

「何か悩みがあるなら私でいいなら聞くよ…いつかのアナタみたい
に…ね」

…んな可愛い顔でウインクすんな。
惚れるだろーが。

まあ、コイツとの馴れ初めは、イジメに合ってるって相談されたか
らだったな〜

懐かしい。

すると今度は、

「よ〜ロビー。一緒に飯食おうぜ〜」

「黙れ優等生。人をホテルの控え室みたいなアダナで呼ぶな。不愉快だ。飯ならその辺のクズ共と食ってる。そっちの方がテメーみて
〜な優等生にはお似合いなんだよ。だからどっかいけ。ボケが！」
声をかけてきた奴は、かなりの辛辣な言葉を言い放たれたはずなの
に、

「あはは。悪い悪い。そうキレんなよ〜、ストレスは寿命を縮める
ぜ〜」

そう言つて、俺の近くの椅子を引っ張つて来て机の横に座る。

コイツは武崎源次郎

どっかで聞いたことのあるような偉人みたいな名前のボケだ。

今、俺のクラスの委員長である。

コイツはなんと学年どころか全国1位の成績の持ち主で、世界模試
でも50位以内には入るぐらいの天才…いや、アル意味天災である。

運動も、学年2位で、（ちなみに俺は全生徒内1位）苦手なものもなく
性格はいたって気さくで優しくて、でもどこか天然なのが男女問わずに人気がある。
なによりルックスは最早、俳優の中の俳優のようにカッコいい、

…ようは完璧超人なのである。

ちなみに、俺はこういう奴が、大っ嫌いだ！！

ちなみに、さつきクラスメートをクズ共と言ったからか、あちこちで俺の悪口が聞こえてくる。

ふんっ！知ったことか！

「ロビー、お前いい加減にその見下し宣言止めたらどうだ？お前、本当にいい奴なのにもつたいねーよ…」

武崎が本気で心配してくる。

武崎も朝麻貴同様、俺に相談に来た奴だった。

「はっ！人の悪口を趣向品とするような奴なんかと話すことはねーよ。」

俺がそう言つと、

「テメー調子こいてんじゃねーぞ…！」

だなんて叫びが背後から聞こえた。

「…ああん？」

俺は首だけでうしろを向く。

するとその男子生徒は一瞬ビビったが、喋ってきた

「原因は全てテメーにあるんだよ！テメーの授業態度が悪いからバ

力にされてんだよ!!」

…まあそうだな

「悪いのはテメーだけなんだよ! テメーこそ、そうやって人を見下すしかできねー」『クズ』だろうが!!」

男子生徒は思いっきり叫んだ。

…すると

「そうだ! ソイツの言うとおりだ!」

「勉強する気ないなら帰れ!」

「二度と学校くんな。消えろ」

「そうだ! 消えろ!」

あちこちから俺への非難の声が聞こえ、
そして

『消えろ! 消えろ! 消えろ! 消えろ!』最後に消えろコールときた
か…

「お前ら、いい加減にしろ!!」

武崎が言いが止まりはしない。

『…うん?』

…ふと、俺は体の異変に気付いた。

異変とは、

犬歯がかなり伸びている。

周りがクリアーに見える。

爪が伸びてきている。

神が少し伸びて、色が漆黒になっていく。

そう言って、開いてる窓の冊子から一気に立ち幅跳びで、ミサイル
みたいな勢いで、学校からひとつ跳びした。

ある場所とある奴のところに向かって…

∴ 4 人と神（後書き）

次回はリファースайдです。

お楽しみに！

P.S.

入学当初は隴火も武崎と同じようにかなりのイケメンかつ運動が出来たから武崎の次にモテモテだった。

… 5 混乱(前書き)

リファースайдです。

ちなみに時間はPM3時くらいです。

… 5 混乱

「は、何やってんだろうな、アタシ…」
街の端の公園でアタシはブランコを小さく揺らしながら、アタシはたそがれていた。

アノ人に言われた事が、アタシの心に響いていた。

「分かる訳ねーよな！！異世界人のお前なんかによー！！」

「…はあ、仲良くなれると思ったのにな…」

アノ人は違う気がした。

今までの神様みたいに、傲慢になったりしないと思った。だけど、弱くはない。

むしろ、正面切ってやり合ったら…負けた。

挑発的な意味合いで、獄返人を滅多刺しにしてたけど。

あのと時のスピードは人間では出せないはずだ。

「…悪神でも神でもなくて、フツウの友だちになりたかったな、」
ブランコを揺らしながら言うアタシ。

しばらく黙ってブランコに揺られてると、

「見つけたぞ、出来損ない！」

と声が出たと同じく、

アタシは袈裟斬りされていた！

「！！！！」

慌てて後方に思いっきり跳ぶ！

…だが

「後ろがから空きだ…」

振り返る暇さえなく、後ろから剣で貫かれた！

「うああああ！！！」

たまらず悲鳴を上げるアタシ。

…けどまだギリギリ大丈夫みたい…

「…ほう、心臓を外しましたか…、さすがはアノ一族ですね…反射でこうも刀身をズラすとは。」

この人の刀はアタシの肝臓辺りで突き刺さっている。

すると、その無口男は、

「まあいいでしょう…、けどコレならどうですか…？」

ソイツはそのまま、傷口をグリグリと刀でいじる。

「うああああ！！！」

思いっきり悲鳴を上げるアタシ。

…痛い…

…痛いよ…

…誰か助けて…

そして、いじるのに飽きたのか、刀身の血を落とすかの如く。アタシを振り払った。

「ドシャッ！」なんていやな音を出しながら地面を転がるアタシ。

「つまんねー、コレで終わりか？『滅敵凶』の一族さんよ〜」

「まあ、コレで任務完了ですよ…。残念ですね…自分の神様を護ることが出来なくて死ぬとは…」

先程、アタシを斬りつけた男と刺した男が近寄りながら嘲笑う。

…確かに、このままだとアタシは死ぬ。んなことは分かりきってます！

…でも、

『護ることが出来なくて』？

「どういう…ことよ…！」

力を振り絞って聞くと、コイツらはこたえた。

「悪神を今から殺しに行くんだよ。」

… 6 守護者の思い

私は走っている。

全力で走っている。

『はっ！逃げられるかよ！』
突如飛来した無数の光の棒がアタシの身体を傷つけていく。

それでもアタシは走る。

アタシの家。

あの廃ビルに向かって…

「…は？」

アタシは理解出来なかった。

「何であの人が殺されないといけないの？
素直に分からなかった。」

「バカかテメーは。アイツは悪神だろーが。
それは分かるよ、
だってアタシが調べたんだから。」

でも、アタシが言いたいのは、

「あの人はまだ悪神になっていないよ！」
そう血を吐きながら叫んだ。

「ああ、そうだ。アイツはまだ悪神じゃねー。」

「だったら何で…」

「…だが、悪神になるだけの要素が有りすぎる…」
無口で背の高い方の男が答える。

「アイツは学校で忌み嫌われた存在だ。アイツは授業態度と口がかなり悪いからだと思ってるが、それだけじゃねー。」

今度は中肉中背の…いや、ちよつと筋肉質の男が言う。

「アイツが嫌われる原因は、顔がかなりいい、運動は化け物レベル、鬨いは負け無し、何より…」
かなり溜めて、ガツチリマンはいう。

「何より…お人好し過ぎるからだ。」
え…

「それがどうして憎まれるようになるの!？」
血を吐く事もいとわない！
理由を教えて！

「…簡単さ、嫉妬だよ…」

そのセリフに、言葉が出なくなる…

「まあ、嫉妬ぐらいの事で、どうこう言う気はないが、人の嫉妬は本気で怖いんだよな。何よりも、優れたものは理解されないのが残念だな。チラッと見たが、俺はああいふ奴結構すきなんだぜ。」

だから殺すのは惜しいんだがなんとガツチリマンは言う。

「…隴火蓮は、近々そのストレスに耐えられなくなる…」

「…どうして？」

その直後、アタシは聞いた事を後悔する…

「テメーのせいだろ。」

ガツチリマンが言った。

…アタシのせい？

「…昨日盗聴できた声に、…隴火蓮が学校の事でキレてた部分があった…」

「…！！！」

絶句とはまさにこのことだ。

驚きすぎて声が出ない…！

「実はよう、隴火蓮には『友だち』って呼べる奴が二人いるんだよ。」

「…その二人がいてくれるから学校で極力、キレないでいられる…」

「なら、大丈夫なんですよ！？」

すると、ガツチリマンのほうが溜め息をついて、出来の悪い子供に言うような口調で、アタシに教えた。

「さっき言っただろ？『テメーのせいだ』って。」

アタシは黙るしかなかった。

「テメーが余計な事言うから俺らはアイツを殺さなきゃいけないかった。その辺理解しとけ。」

ガツチリマンは辛辣な事を言い放って、アタシを踏む。

アタシのせい…
アタシがあの人を…

なら、ヤルことは一つだ。

「…まだ悪神にはなっていないよね？」
アタシは根性で立ち上がって、念のため確認しておく。
向こうの二人は怪訝そうな顔をしたが、茶化すこと無く教えてくれた。

「…まだなっていないよ…」
「あぁん？それがどうしたんだ？」

「…まだなっていないなら、
一つだけ…方法がある。」

あの人が、『悪神』なんかにならない方法が…

「アタシを、この『サリア・リフファープ・哀奈』を殺せばいい。
そうすれば、あの方は『悪神』なんかにならないさ…」

前の二人を確認すると、二人は目を見開いて驚いていた。

「…ああ、そうだったな。テメーはまだ契約承認待機中の『神の守護者』だったよな」

「…契約が破棄された場合、ペナルティとしてその者は神としての権利を剥奪される…。すっかり見落としてた…」
んな会話をしてる二人。

バカなの！？

常識でしょーが！

「あんだ達、もしかして…契約待機中のアタシを殺した後、神の権利が無くなったあの人を殺すつもりだったわけ？」

『ギクツ！！！』

「あんだ達、本当にバカなんじゃないのー！！」
と叫ぶが、体が限界を越えていた。

私は顔面から倒れ込む。

それを見たガツチリマンが、ある提案を出してきた。

「どうだ？一つ、ゲームをしねーか？」

…ゲーム？

「ルールは簡単 お前はあの廃ビルまで逃げる。それを俺が追いかける。」

…ようは鬼ごっこか…

「…僕は…」

「お前は悪神の見張りだ。」

「…えー」

「いいから行け！」

「……分かったよ……」

もう一人はどこかに行った。

アタシは…実はもう起き上がれる状態だ。
なぜならば…

「治癒は終わったか？」

…今から説明しようと思っただのに…！

「しっかし、『滅敵亡』の治癒能力は目を見張るな」

コラ！ネタバレさせんな！

「治癒したってことは…やるんだな、鬼ごっこ。」

うわー。鬼ごっこが普通に言ってるし…。

まあ、そんな事より…

「どうしてそんな事するの？」

向こうに利益なんて無いはずなのに…

すると、ガツチリマンは嫌な笑顔で言った。

「なんとなくだ。」…どうやらコイツはバカみたいだ…

そして、アタシは今廃ビルの屋上にいる。

回想してるうちに廃ビルについて、もう屋上まで追いつめられたのだ。

「どうやら終わりのようだな…」

2Mはある光の棒を右手に持ちながら、アタシに近づいてくるガツチリマン。

「よく、逃げたと、ほめて、もらいたい、な」

アタシは満身創痍で体中血を流して肩で息をしている状態で…

笑ってやった。

「じゃあ、そろそろやるか…。楽しかったぜ、出来損ない。」

ガツチリマンはこちらに向けて、槍投げのモーションでその光の棒をなげた。

光の棒はこちらに一直線に飛んで来る。

狙いは多分、心臓だな…
心臓だけは治らないから…

そんな感じで、ある時を思い出した。

それは、バスの中で見た、
凜々しい顔つきの…あの人だった。

…ふと、アタシは思った。

もし、私が神の守護者なんかでなく、普通の人間で、
あの人も神なんかでなく、普通の人間だったら…どんな人生だった
かな？

そう思うと、無意識にアタシは喋っていた。

「あの人の名前…、聞いてなかったな…」

光の棒がアタシを貫く。

そのとき！

ズドーン！！！！！！！！！

と、何かが光の棒をへし折って落下してきた。

土煙（？）が冷めると、ソコにいたのは…！

「いよおう、久しぶり〜。元気してたか〜」

…髪や牙や爪や身長がかなり伸びた…

…『悪神』がいた。

… 6 守護者の思い（後書き）

次で『守護者との出会い』編は終了です。

まあ、楽しみにしててください。

感想、待ってま〜す！

… 7 契約（前書き）

ようやく『守護者との出会い』編が終わりましたー
＼（＾ー＾）／

イヤー、ハイペースで書いたな

まあ、忠告を二つ

一つ、

今回は少しピンクです。（＾ー＾；）

二つ、

悪神はまだまだ終わりません！

その忠告を心に刻んで、

本編にレッツゴー！！

… 7 契約

俺はひとまずリファアの状態を見た。

リファアの体中にはいろいろな傷が浅い深い関係なく無数にあった。そして、そこから血が流れている。

リファア自身は肩で息をされていて、立っているだけしか出来なさそうだ。

「リファア、気分はどうだ？」

俺が聞くと、

「あはは、砂漠に捨てられたら蛙並みに大丈夫だよ」

「イヤ、それはアウトだろーが。」

まあ、返事からして大丈夫だろう。

「まあいいか。しばらく休んでろ、俺が片付けてやるからさ」
俺はリファアをお姫様抱っこした。

「ちょっと！アナタ何勝手に触ってんのよ！」
リファアは暴れる。

まるで釣り上げた後の魚みたいだ。

「そんなものに例えるなー！！」

「うん？俺の心が聞こえるのかい？」

「違うわよ！アナタの表情…」

リファアの言葉は遮られた。

一本の光の棒によって。

…しかし、

「すまない、今は戦闘中だったな。」

「!!!!」

俺は、先程光の棒を投げってきた奴の真後ろにいた。

「クソ!!!」

男は手のひらでまた2Mサイズの光の棒を作りながら振り返り際に振り抜いた。

…だが、

「リファアー、ここで待ってる。」

俺はすでに給水棟の上にリファアーを下ろしていた。

「あ、アナター一体どうやって…」何か言おうとしたリファアーの口を人差し指で止める。

そして、

「俺の名前は臙火蓮だ。アナタや悪神なんて呼ぶな。俺にも名前はあるんだよ…サリア。」

そう言うと、リファアーは、

「え、あつあの、そ…こえっ!」

パニックってた。

…失礼だが、面白い。

「サリアは見てるだけでいいさ。五分もかかんないから…ね。」
俺はリファアーを見たまま、パキン!と光の棒を裏拳で叩き割った。
まるで、これが証拠だと言わんばかりに、

俺はリファアから離れて、あの男のところ歩いて向かう。

…もう一つの人格を解放しながら…

「オイオイ、お前俺に勝つ気あんのか？あるんなら卑怯な手段の一つや二つはやんねーと俺には勝てねーよ。」

そう言うと、

無数の光の棒が現れた。

「それは…コレを食らってから言えー！！」
無数の光の棒が俺に降り注ぐ。

しかし、

パアン、パアン、パアン…と俺は叩き割った。

…だが、

「隙あり！！」

アイツは無数の光の棒と一緒に突っ込んできて、右手に持った光の棒を振るう。

…だが、

「甘いな」

俺は片手真剣白刃取りで光の棒をうけとめた……

そして、

「…リファアを傷つけた罪、今償え。」

俺はソイツを死なない程度にぶん殴った。

…けど、死んだかもしれない。

なぜならば、

殴られたアイツは、かなり遠く（3K）まで吹き飛ばされたからだ。
生きてたら…知らねー

「大丈夫？ 隴火くん？」

俺はリファアを指差した。
それから

「蓮でいい。それより、お前も言わなきゃならない事がアルだろ。」
リファアにウインクする俺。
しばらくすると、

「はじめまして。アタシの名前は、サリア・リフファープ・哀奈…」
それからゆっくりと宣告した。

「…神の守護者よ。」
そして、そのまま立て膝をつく。

「我、神の守護者なり。我はいかなる時も、神を護る絶対の盾となり、神に仇なす者を貫く絶対の矛となる者なり…」
リファアは急に何か詠唱を始めた。

「神が望む者をすべて捧げよう、我の心身のすべてを委ねよう…」
うん？

今何かやべーことぬかしたような…

「朧火蓮。貴殿は…『悪神』は、我を必要とするものか、答えよ…」
ついに、俺が答えなくてはならなくなった。

イヤ、違うな…

ついに、答えるチャンスが出来た！

「我、悪神として問う。」

ちよっとパクってみよう

「貴様の言葉に嘘、偽りはないな。」

「ありませぬ。」

ほぼ即答だった…！

「我は悪神として、守護を許可する。」

まあ、答えなんて決まっていたさ…

初めてあったときから、こんな風になるとどこかで思っていたから
な…

「ならば契約の儀式を実行する。」

そう言つと、リファアは、身長がかなり高くなった俺の目の前にき
て、

そして素早く後ろに回って、

いきなり膝カツクンをやってきた。

そして…

「な、何すん…」

そして…いきなりキスしてきた。

「！！！！！！」

俺は引き離そうとしたが左手をリファアの右手で抑えられ、リファアの左手は俺の後頭部をしっかりと固定している。

リファアは、自分の舌を絡めてくる。

俺は抵抗出来ない…

イヤ、むしろ俺も舌を絡める。

この行為をする事で伝わって来る…何かを求めるところに。

ただ、コレはただのキスじゃない。

何かをお互いに循環させているのだろう。

まあ、その循環は一分ぐらいで終わったが…

俺たちは五分ぐらいキスをしていた。

…まるで、お互いを求め合っているかのように…

その後、俺たちは崩れ落ちるように膝をついた。

2人共、目はトロンとしている。

最初に切り出したのはリファアだった。

「これで…契約完了だよ…。」

…こうして俺らが、

…世界で最強のツーマンセルが出来たのだった。

… 7 契約（後書き）

多分、く武偵の道に集中するからしばらくは投稿出来ません。

まあ、しばらくお待ちください

☺ (´ー´) ☺

二章〈親友と神〉（前書き）

ただの会議です

二章〈親友と神〉

「さてと、じゃあもう主従関係になったんだし、腹割ってはなそうぜ」

俺たちは今、例の廃ビルのリファアの部屋にいる。

「うん！じゃあ、事故紹介からいっくよ」

「事故紹介してどうすんだよ。」

「ナイスツツコミー！」

もはやお約束だな…

「アタシ達は冥界に住んでいる一族。」

「はい！いきなり異世界人宣言きたー！！」

「その中でも、アタシたちの一族は最強なのだ」

「へへ、良かったね」

「その名を『滅敵凶』って言うんだ」

「うおー、カッコいいー！」

「その一族は地獄の監視と神様の護衛を含む、身の回りの世話をすることが生きるいみなんだとさ」

「ソイツは大変だ」

「んでアタシも一族の一員だから、神様を探しに現世に来たのよ」

「それでバスの出会いに続いて、」

「しまいにはキスしちゃいました」

「ぶざけんじゃねー！！！！」

やっとなツツコめたよ！

長いわ！

前置き長いわ！

「まあ、契約には必要なんだよ」
「うるせー！俺は、その…ファ、ファーストキスだったんだぞ！」
「そう？アタシは三回目だけど？」
「最悪だー！！！！」
「コイツには恥じらいが無いのか！？」
「まあ、その…あんなに激しいのは初めてだったけどね…」
「うるせー！！！！！」

そのまま騒ぐこと10分。

「つまり、お前は今日から俺の世話をする俺の…いや、『悪神』の守護者なんだな…」俺がそう言うのと、
「違うよ、確かに『悪神』として契約してもらったけど、アタシはそれ込みでアナタを護るつもりよ。臙火蓮くんと、ウインク混じりで答えてきた。」

「リファア、フルネームで呼ぶな。とりあえず臙火か蓮か、どつかにしる。」

俺がそう言うのと、

「うーん、迷うな」

…

……

……

うーんと悩んでから五分経過

長いわ！

何回同じシッコミをさせる気だ！

するよ、

「じゃあ、間をとって…『ロビー』で！」
「何でテメーらはそう言う考えになるんだー!!」
「なぜだ！」
「なぜそうなるんだ！」
「アレか！」
「嫌がらせなんだなー！」

とか思っていると、
「ねー蓮。とりあえず服どうするの〜？」
と聞いてきた。

…結局は『蓮』か…
…いいな！

「まあ、確かに服が必要だな…」
「確か、俺は悪神モードの時に髪やら爪やら犬歯やら身長やらが一分に1センチつつ伸びてたからな…」
「もう服がかなりはちきれてるぐらいだ。」

今は多分、身長が180以上はあるだろう。

…これが180の視点かあ…！

そう満足してると、

「まあ、即席なら出来るよ〜」

と、リファアは言った…て！

「マジかよ！？」

「マジです！」

「そしてまた即答かーかい！？」

「即答です！」

「即答だな！」

「即答です！」

「熱中症で？」

「卒倒です！」

「ギャグがちゃんとできたー！！！」

俺は嬉しさのあまり、なぜかヘッドスピンをしていた。

まあ、リファアはその間に、大きな布をイジリ初めて、

「できたー！！！」

と、ある物を俺に手渡してきた。

「うん？浴衣か？」

俺が広げた布は、フツウに考えて浴衣だった。

「ああ、もう少しで帯と羽織が出来るから待ってて〜」

「ああ、分かつ〜」

「出来たよ〜」

「速いわー！！！！」

まあ、そんなこんなで俺はリファアが作ってくれた浴衣を着て、リファアの高級そうな椅子の目の前の高級そうなソファアに座った。

「…さて、これからどうするかな…。」

やっぱり、いきなりこんなに身長とかいろいろ伸びたまま家に帰るのは無理がある。

…多分、病院にぶち込まれるな…

となると…

「リファア、しばらくここに住ませてくれないか？」
主従関係なんだし、これぐらいはいいだろう。
事実、

「うん、いいよ。そっちの方がお世話をしやすいからね。」
と、軽く了承した。

…後は、

「学校は…諦めるしかないな…」

なぜか俺は、その事が異様に心残りだった。

二章〈親友と神〉（後書き）

次回、友情パワーが炸裂？

まあ、楽しみにしてください！

… 2 学校（前書き）

更新遅くなってすみません！

く武偵の道くハマってました。

次からはちゃんと週1で更新します。

… 2 学校

俺はあの後、夜になるのを待ってから、動き出した。
今の俺は、今朝の俺と全然違う。

昼間に計ったが、身長は185cm、体重は75kgと、16kg
アップして、ショートカット気味だった髪は肩を軽く越して、八重
歯と爪は3cm伸びた。

こんな状態で家族や知り合いに会ったらどうなる？

卒倒されるわ。

もしくは病院へ強制連行だな。

だから俺は今、この夜の人気のない道を歩いている。

ちなみに、リファーにはお留守番してもらっている。

最初は、

「主人にはどんなときも必ずそばにいなければいけないんだよ？」
と言っていたが、

「就任1日ぐらいはゆっくりさせてくれ。それに、俺の実力見ただ
ろ？」

と、同情 and 説得力ある事実をまぜたら、「うーん、まあいつか
！」と軽く了承してくれた。

…別に軽い性格は嫌いじゃないが、
もう少し粘ってくれてもよくね？

了承されたはいいんだが、ちょっと複雑な気分になったな

まあ、そんな事があって、今は一人で散歩中なのである。

それにしても…

「ハア、悪神か…」

何でだろうな

あまり悲しく無いのは…

フツウなら悲しむものなんだがな。

ガダンガダンと遠くで電車の音がする。

ゲコゲコと蛙の大合唱が、今この時を平和と感ずることが出来る。

…そんなの俺だけかな？

まあいいや。

俺は視線をやや下に向けて、漫然そぞろと歩いていた。

田んぼ道や線路沿い、住宅街に急な上り坂を上がっていると、不意にデカい建物が視界に入った。

前をよく見ると、

…それは、俺が今日まで通っていた。『私立貴秀高校』だった。

「…無意識の内にこんなところに来るなんてな…」

俺は、ふつと失笑した。

その行動は、自嘲気味だった。

「ヤッパリ、まだ諦めきれないみたいだな、高校生活に。」

持ち前のふざけ口調で喋ってみたが、聞こえてくるのは蛙の鳴き声だけだった。

ゲゴゲゴと、それ以外は車の音すら聞こえない…

「…帰るか。」

このままここにいても無駄と感じたからか、俺は踵を返すように歩き出した。

「カラ、カラ、」

と、下駄の足音が蛙の鳴き声と混ざり合っているいい音を奏でる。

貴秀高校の下り坂にある眼前にある緑色の美しい景色や、この時期特有のアジサイを見ながら、ゆっくりと歩く。

時々、貴秀高校を振り返りながら…

「カ、カ、カ、カ」

初めは歩きだったが、いつの間にか…

「カカカカカカカ！」

俺は走っていた。

何でかって？

理由は明確だ。

俺は離れたかったんだ…

『消える！』

昼間にクラスメイト言われた『消える』コールが、俺の身にしみる。

いつの日か、じいちゃんは言っていた。

『誠の正義とは、孤独である』と…

それを思い出して、俺の足は止まった。

…そうだったな。

俺は正義どころか、『悪神』になっちまったんだからな…

…どこで間違えたんだろう？

俺は、他人より悪を見逃しておけない性質だった。

だから、

今まで俺はイジメから強盗集団の制圧までやってきてのに…

イヤ、違うな。

それは都合のいい言い訳だ。

僕はただ、『破壊し尽くしたい』だけだったのかもしれない。

『悪は徹底的にぶっ潰す』という大義名分で悪い奴らをボコボコに
してきた。

みんな全治1ヶ月は当たり前だった。

『どいつもこいつも、クズはぶっ潰す』中学の時の口癖だ。

じいちゃんは、「正義の為の暴力は最終手段。先ずは口論から始め
よ。」

と言っていたが、俺はいつも手が先に動いていた。

…そこらへんが、『悪神』に選ばれた理由かもしれないな。

…悲しい限りだぜ…

それに、俺はもう…

…もう、俺は学校に行けないんだ。

つまり、もうアイツらには会えないんだよな…

そんな事を思いながら、前なんかを見ずにがむしゃらに走っていた
その時！

不意に

「…アブない!!」

と、何かが俺の脇腹に衝突してきた。

そしてぶつかられた俺は、

「のわアアアア!!」

体のバランスを崩し、近くのゴミ置き場に思いっきり顔から突っ込んで行った。

その直後、「プップー！」とクラクションの音が聞こえた。

それに先程の発声とタツクル（仮定）…

うむ。

どうやら、いつの間にか車道に出ていて、車にひかれそうなところを誰かに助けられたみたいだ。

…まあ、
今の俺なら、あの光の棒（廃ビルの壁を全部貫通するぐらい鋭い）
を裏拳一つで無傷で軽く叩き割ったぐらいだし、
新幹線にひかれても骨折一つしないだろうが…

一応、助けてくれたんだ。
礼ぐらいは言わなくては、

「ああ、助かったよ。ありがとうな。」
俺は立ち上がりながら礼を言っただけを見ると、

…ソコにいたのは、

「…ハア、ハア、ようやく、見つけた、わよ、臃火君…」

ソコにいたのは…

クラスメートの朝麻貴都だった…

∴ 3 説得（前書き）

更新遅れてすみませんでした!!

☺ (_ _) ☺

… 3 説得

「…朝麻貴。」

何てこつた…。

よりによつて一番見られたくない奴に見られちまつたぜ…。

「ハア、ハア、んっ…探したよ、臙火君。」

朝麻貴は、真っ直ぐ俺を見つめる。

その目は、今までに見たことの無いくらい鋭く、真剣な目をしていた。

「ああ、助けられてありがとうな。だがワリー、今急ぎの用事があるんだ。またな。」

そのまま、俺は逃げるように歩き出す。

だが、

「待って！」

それよりも速く、朝麻貴が俺の袖を掴む。

「…何だよ、何かようでもあるのか？」

俺が突き放すような言い方をすると

案の定、空気の読めない朝麻貴は

「…昼のあれ、何？」

と聞いてきた。

「お前には関係無い。」

しかし、俺も俺だ。

咄嗟にいい言い訳が見つからず、突き放す返し方しか出来なかった。

…その程度で朝麻貴が諦める訳ねーのに、

「臙火君、私はアナタの力になりたいの、助けたいの！だから…
何があつたか教えて？」

朝麻貴は目つきは変わらないが、口調がいつもどおりに戻ってきた。

つまり、

頑として引かないつもりだ。

…仕方ない

余り傷つけれなくなかったが、

コイツは一边痛い目みないと分からないみたいだな。

「ハハハハハ！！オイオイ、何抜かしてんだー人間？」

俺は、微妙に悪神の力を解放しながら朝麻貴に近づく、

ドス、ドス、

と、人間なら有り得ないような足音をならしながら

ゆっくりと、ゆっくりと

不敵に近づく

『お前なんかじゃ相手にならねーよ!』
と、歩き方で示しながら…

「…お、臙火君？」

朝麻貴は、急に雰囲気が変わった俺におののいて、
ジリジリと後ろに下がって行く。

顔は、ほんの少しだけ恐怖で歪んでいる。

そんな朝麻貴に俺は追い討ちを掛ける

「お前…俺が怖いんだろ？」

すると、首を大きく振って否定する朝麻貴。

「違う！あたしは…」

朝麻貴は何かを言おうとして、黙った。

理由は簡単。

「どうした？何を黙っている、先程の威勢はどこに行ったんだ、ア

アン？」

朝麻貴が驚いた理由は、

「……いつの間に……！」

俺は、5mあった二人との距離を、朝麻貴がまばたきをしている間に体が触れ合うぐらいの距離まで持ち込んだのだ。

「ハハハハハ！！いいね！その恐怖で満ちた顔！写真に撮ってやりたいぐらいだよ！」

俺は、朝麻貴を嘲笑いながら、その端正な顔を手を伸ばす。

「……あ、イヤ……！」

朝麻貴が俺の胸を押しして距離を取ろうとする

だが、それよりも速く、その両手を掴み、そのままの勢いで近くの壁に押し付ける。

「キヤ！」

小さな悲鳴を上げて、目を開いた時、

「……！！！」

朝麻貴は声が出なかった。

朝麻貴の顔からすぐ近く、
息がお互いにかかる距離に…

俺の顔があつたのだ。

「女がこんな時間につろつく事が、どんな事か…分かるよな。」

俺はそう呟いて、その端正な顔に俺の顔を近づける。

朝麻貴は、

目に涙を溜めながら…

体を震わせながら…

ゆっくりと、

目を閉じた。

それをみた俺は、そのまま顔を近づけ、
「…んっ。」

朝麻貴の小さな声を間近に聞いた。

俺と朝麻貴は全く動かない

ガタンガタンと遠くで電車の音がする。

そのまま、30秒が経過して、
俺は動いた。

「…ふつ。残念ながらテメーの負けだな、人間。」

耳元で、そう言いながら

俺は朝麻貴の、魅惑的な唇から指を引いた。

「…あ」

朝麻貴は顔を真っ赤にしている。

まあ、普通に考えたら俺にキスされたと思うだろう。

それを「実は唇じゃなくて指でした」なんてオチだから赤っ恥も
いいところだ。

…だが、それよりも

「お前は、俺を助けるつもりでいたが、結局は俺のいいなりになっ
た。コレがどつという意味かわかるよな」

「…そ、それは…」

朝麻貴が赤面のまま、気まずそうに目をそらす。

だが、俺は止まらない。

「お前は助ける事を諦めた。つまり、それは俺を助けられなかった
って事だよな！！」

「…ち、違う！私は…」

「何が違うんだ？フツウだったら最後まで抵抗するだろうが？」

「…でも！」

「でも、何だ？あれか、『アナタが強引に来るから仕方なく…』てか？」

「…そうじゃない！」

「ならなんだ？ハッキリ言いやがれ。」「…私は…」

「毎度毎度、喋るのがトロいな…テーマはよ。」

「……………」

「そして凶星を刺されるとダンマリを決め込む。ハッ！一周回って笑えるぜ！」

俺は、もう止まらない。

当の朝麻貴は、

「…つく、…ひつく」

下を向きながら、

さめざめと泣いていた…

「ハハハハハハハハハ！何泣いてんだあ、お前。助けられなかったのを泣いて済まそうってか？甘いね。まるで砂糖をぶっかけたパイナップルみてーだ！ハッ！そんな気弱な奴が『アナタを助けたい！』とかほざくな！寝言は寝ていいな。無口でネクラな優等生さんよお！」

と、最早辛辣のレベルを超えた言葉の暴力を行使する俺がいた…

なぜだ？

普通ならオレはこんな奴を救急病院が必要になるレベルの暴力を行使するぐらいの怒りの暴言なのに…

悪神化してる俺には…

とても気持ちよく感じる。

まるで、暴言が森林の中で静かに聞こえる鳥の声のように、
…心地よい。

だが、もういいだろう。

朝麻貴はもう、
充分に、傷ついた…

「じゃあな、おおぼらふきの人間。」

俺は、そのまま朝麻貴を通り過ぎるように、廃ビルへ向かう。

背後からは

まだ…朝麻貴の泣き声が聞こえる。

だが、俺は構わずに歩く。

また、悪神化したせいで髪伸びたな
とか思いながら、

逃げるように、早足で歩く。

カラッ、カラッと下駄の音が静かに聞こえる。

朝麻貴は…
ついて来ない。

ほんの少し、その事が胸に刺さったが、
構わん！

俺はズンズンと歩く。
寂しさを振り切るようにしながら…

すると、

『キヤアアアアアア！！』
と、静寂を切り裂いて
近くから悲鳴が聞こえた！

というか…この声は…！

『…朝麻貴!!』

俺は気づいたら、走り出していた。

そして五秒足らずで先程の場所に戻る。

そこにいたのは…

「…獄返人!!」

見た目はフツウの人間だが、
今、悪神化している俺なら分かる。

あの、人離れた精神の疾患ぐわいと、腐った殺気は、

バスで会ったあいつらと変わらない。

ならば、ボコボコにして地獄に叩き返すのがフツウだが、それも出
来ない。

何故なら…

「んー、んー!」

朝麻貴が…向こうに拘束されてるからだ。

朝麻貴は、両脇から二人のムキムキの獄返人に両腕と体を地面に抑
えつけられて、

もう一人の獄返人に、左手で口を防がれて、
右手で…

光輝くナイフを首筋に突きつけられていた。

「…テメーらあ…」
俺も睨むぐらいしか出来ない。

俺と朝麻貴の距離はやく20m

悪神化なら0.1秒でいけるが…

ナイフをずらさねーでうまく助けるまでの事はこのスピードでは慣
れていない。

つまり、
下手したら朝麻貴を…殺してしまう!!

すると、
獄返人が、俺の周りを囲んでジリジリと距離を縮めていく。
そして、
全方位から一斉にパンチやキックが飛んできた!

「…いたっ!」
小さい悲鳴を上げる俺。

まあ、実際はあまり痛くないのだが…

しいてゆうなら、

『5歳児のパンチを大量に食らった』感じかな

だが、俺は相手のやろつとしてることが分かった。

なるほど。

フツウに戦っても俺には勝てないから、

人質を使って、更に全方位からの一斉にリンチときたか…

まあ、妥当だな。

現に、俺は手出しできない。

ただ、向こうの攻撃が止むのを待つだけだ…

だけど、リファアは言ってたよな

『獄返人はアナタを殺すために送られてきた』って。

つまり、

コイツらは俺が死ぬまで殴り続けるって事だ。

だが、反撃すれば朝麻貴が死ぬ。

『ツチ、どうしようもねーな…』

結局、

俺は具体的な案が出るまでの20分間、

ずっと悲鳴を上げずに

殴られ続けていた…

… 3 説得（後書き）

次回は怒り爆発？
リフアー活躍？

のかなりカオスな感じですよ。

お楽しみ〜

… 4 守るべき者（前書き）

多少、グロイ…のかな？

長いのびじ注意トヤロ。

… 4 守るべき者

ツチ…隙が全くねーなあ

四方八方から拳や蹴りが飛んでくる中、
俺は静かに隙を狙う。

だが、相変わらず獄返人は朝麻貴から離れずにナイフを首に押しつけている。

…と言うより、俺の周りにいる獄返人が邪魔でよく見えない。

…だけど、

『……………！…！』

…だけど、

朝麻貴の泣きそうな顔が…よくわかる。

何を言いたいのかも…よくわかる。

痛い程に…伝わる。

『これ以上、傷つかないで!!』

そう聞こえる。

そう言われても、俺は動けない。

動けば朝麻貴が……死ぬ!

それは、ダメだ!!

絶対にダメなんだよ!!!

「グハッ!」

遂に、ダメージが耐えられる限界を越えて、悲鳴をあげる。
だが、それでも獄返人の攻撃は止まらない。

獄返人の右ストレートが俺の顎に入る。

「ウグッ!」

仰け反った俺の腰を鋭いローリングソバットが襲う。

「グアア!!」

前に倒れ込んだ俺の顔面に膝蹴りが待ち構えている。

「ガフツ!!!」

あまりに威力があつたからか、俺は近くの壁に倒れ込む。

ドシャ!つと嫌な音がして、辺りに血が滲み出す。

朦朧としている意識をなんとか保って、薄目を開くと

案の定、獄返人がジリジリとにじみよる。

ひとまず、態勢を立て直さないと、

「ウ…グウウ」

何とか立とうと地面に手を突いて、必死に体を起こそうとする。

だが、不意に左腕から、

ボキンッ!!

という音が聞こえ、

また地面に倒れ込む。

けど、そんな事より…

『…今の音って…!!』

先程の音が気になったから、

恐る恐る手を付いていた左腕を見ると、

俺の左腕は…

ドデカい棍棒によって、潰されていた。

「…ッギヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!…!!…!!」

俺はあまりの痛みで絶叫をした!!!

当たり前だ!

いきなり、左腕が潰れたんだぞ!

叫んで何が悪いんだ！

デカめの獄返人が、

俺の左腕から棍棒を引いたかと思うと、

「アウ…ウルウワア…！」

棍棒を、今度は頭目掛けて振り落とした！

「ウウ…クソ…！」

悲鳴を上げる体に鞭打って、
俺は慌てて上空に跳飛んだ。

飛んだ直後に背後から、

「ドガアン…！」

と、何かが壊れた音がした。

冷や汗をかきながら、地上から20m程度の上空まで上昇して、
そのまま上空に留まる。

昼にリフアーに聞いたが、
神は空を飛んだり歩いたり座ったりできるしい。

その時は、

『ふーん、便利だな』

程度で、軽く受け止めていたが、
今となっては、
かなりありがたいぜ。

少し千切れてしまった左腕を押さえながら地上を見下ろす。

眼前に広がる地上には、
明かりが消えて人通りの無い道に約20人程の獄返人で埋まっていた。

なぜ滞空してるかというと

リフアー談で、獄返人についていろいろと教えてもらったからだ。

獄返人は、塩水に弱いとか日の光は力を弱くするとか月の満ち欠け
によって力が変わるとか獄返人にも生前に犯した罪のレベルで力が
変わるとかe t c …

その内の一つで、

獄返人は跳ぶ事は出来ても滞空する事は出来ないらしい。

しかも、せいぜい5mしか跳ぶことが出来ないらしい。
だから、滞空して様子を見ているのだ。

しかし、こう空にいる間も獄返人はこちらを見ている。

そして、朝麻貴の周りも相変わらず5人位の獄返人が囲んでいる。

隙が全くないな…

『ツチ、あの包囲網を強引に突破して、朝麻貴を助け出すにも…腕一本じゃな……』

軽く舌打ちして、チラッと左腕の様子を見る。

左腕は相変わらずダラーンとだらしなく垂れ下がったままだ。

『…リファアールが言った事、試してみるか。』

俺は、右手で垂れ下がっている左腕を押さえ、意識を集中する。

すると、左腕がまるで動画を巻き戻ししているみたいに治っていく。

これまたリファアが言っていた事だが、
神は無尽蔵の自己再生能力もあるらしい。

…どんだけチートづくしなんだよ、神様って…

一秒で治った左腕をボンヤリ眺めていると、

『ビュンッ！』

と、風を切る音がして、
不意に、影が俺を覆った。

『まさか！』

慌てて顔を上げようとしたら、
グワンッ！と変な衝撃とともに視界が急に変わり、

ドガアアアアッ！！！！

と激しい轟音が辺りに響き、何かにぶち当たった！

俺は何かにぶつかっただけ、衝撃のままに何度かバウンドしながら辺りを転がり、コンクリートでできた壁に背中と頭が勢いよくぶつかる。

「…ンツ、ガハツ！」

耐えようとしたが俺は血を吐き出してしまっ。

また、リファアが作ってくれた浴衣に赤々とした血が染み込む。

だが、そんな事より…

辺りが土煙で見えなくなるか、俺は理解した。

「あの獄返人啊…！！！」

多分、あの獄返人が俺のところまで跳んで来て、あの奇妙な棍棒で殴ったのだろう…

上空20mのところにいる俺のところまで……

多分、あの獄返人は通常の獄返人じゃない。

生前に大悪を犯した奴だろう。

だから他の奴らと違って、俺のどこまでこれたんだ…！

…だけど、そんな事より今は、
自分の事を考えなきゃな…

『ああ…ヤバい、意識がとびそうだ…』

さっきの一撃は、頭に直撃したが、
いいんだか悪いんだか、脳震盪で済んだみたいだ。

だが脳震盪は脳震盪、

うまく体が動かないし、意識が朦朧とする。

体中に痛みが走る中、
俺は理解した。

『俺は……………もう限界だ。』

多分、この攻勢が終わったら倒れこむだろう…

その後、どうなるかは知らないが、

少なくとも命はないな

けど、アイツが死なないですむならいいっか…

俺の願いは叶う訳だし…

結果オーライだな
うん。

…なのに、

「ンッ！ンッ！ンッ！ンッ！ンッ！ンッ！」

朝麻貴、お前…何で涙なんか流すんだよ？

後少し辛抱すれば助かるのに…

なのだよって…

そんな悲しみに満ちた顔で泣くんだよ…

『お願い！逃げて！！私の為に傷つかないで！！』

って、言うんだよ……

…そんなのじゃあ…

………そんなのじゃあさあ………！！！！！！！！

俺、

勝手に死ねねーだろうが…

「斬真空・真一文字」

呟いて顔を上げる

俺の近くの獄返人の腹部から上は、
間欠泉の如く吹き出る血で上半身は無い。

ブシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

血の噴水を受けて、

俺の漆黒の浴衣は真っ赤に染まる。

ハッキリ言っ
て、
気持ち悪い……

『……だけど……!!』

血のシャワーを浴びて全身が真っ赤になる中…

朝麻貴を静かに、

だが迫力のある目で見つめる。

目で、『俺は大丈夫だ』と伝える。

朝麻貴は、静かに小さく頷く。

そして目で、『それなら……助けて。』
と、伝えてきた。

そんな朝麻貴に、

『ああ、任せろ。』

そう目で告げて、俺はゆっくりと立ち上がる。

そう、

『お前が呼んでくれるなら…!』

腰を落として前屈みになる。

『お前が助けを求めてくれるなら…!』

右足を前に出す。

『お前が俺にいてほしいと思うなら…!』

全身に力を入れ、右足に重心を乗せる。

そして……

俺は……

「俺は……お前を絶対に守る……！！！！！！！！」

右足で地面を力強く踏み切り、一気に駆け出す！

俺の走りの速度は、
人がまばたきをする間に100mを走り去るぐらいの速さ…

今は満身創痍だが、それでも風のような速さには変わらない。

つまり、獄返人程度のレベルなんかじゃあ、見切れない！

そうなるよ、

後は朝麻貴を傷つけないように獄返人をぶっ飛ばすだけだ！

獄返人を蹴散らす為に

もう一度、『斬真空・真一文字』を行う為に左手を手刀の形にして、朝麻貴を抱えて走り去るときに、風並みの速さに耐えきれないだろうから保護を兼ねて薄い結界を右手に収束させた。

その時だった…

気づいたら、

俺の目の前に、人らしきものが現れた。

ソイツの白銀の美しく、清楚な長髪が遅れてたれ落ちる。

そしてソイツは、空から着地したような態勢から下に向けていた顔を上げた。

ソイツの顔を見たとき、
俺は息を呑んだ。

色白な肌に、美しく輝くコバルトブルーの目、その目はキリッとしていて、まるで意志の強さを表しているみたいだ。
そして細いが薄い桃のような色をした美しくをより際立てる唇。その唇は、への字にしまっている。

つまり…

全てを魅了するような美少女が俺の目の前にいた…

現に、俺は見とれていた。

見とれていたが為に、
その女の目の前で急に立ち止まり、構えを解いてしまった。

だが、それがいけなかった。

その女は、鋭い目つきをさらに鋭くして、
しゃがんだ態勢から右手に持っていたある物を両手に持って、左下
から右上に思いつ切り振り抜いた。

それと同時に、
俺の右骨盤から左鎖骨にかけて鋭い衝撃が走り、

ブシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！！！

俺の体から鮮血がそこから中に大量に飛び散った！

大量の血を出しながら、俺はそのまま背中から大の字で地面に倒れる。

ガンツ！というアスファルトの硬さも気にならない。

ただ純粹に…

『痛てえ…』

痛みのある部位を左手で触ると、何かがこぼれ出ている。

見てみると、左手は真っ赤だ。

そんな事より、

俺は、先程の銀髪女を眺める。

膝立ちの姿勢から立ち上がったソイツは、
立ち上がり際に右手に持ったモノから血を落とすように左上から右下に振る。

ソイツの右手に持っているのは、『日本刀』だ。

…でも、アレはただの日本刀じゃねーな。

雰囲気がどことなく違うし…

まあ、

それで斬られて、血を噴き出した訳か、俺は。

血を刀から振り落としたソイツは、ゆっくりと俺に近づく。

対する俺は、

痛みと体力の限界からか、全く動けない。

仕方ないからしばらく観察するか…

ゆっくりと近づいてくるソイツは、

…身長は165cmぐらいだな…

服装は上半身がピッタリと張りつて、半袖みたいな位置から切られた薄い黒のアンダーウェアに、肩や女性の平均よりやや小さいぐらいの胸のところに軽い装甲盤がついた服装で、甚平みたいな上着が脱ぎ捨てたような感じで腰の太い布からだらしなく垂れ下がっている。下半身は真っ白な袴に、軽い草履みたいだ。

…うーん

しっかし、

胸から下は丸見えだし、その見えているクツキリとくびれた腹とかが微妙に色気をかもし出してるな

とか思っていたら、

限界ギリギリまで近づいたソイツは、俺の両腕を両足で軽く踏んで押さえつけてる。

それと同時に、首筋にヒヤリとしたモノが押し付けられる。

「アナタは、我々の敵になりゆる神…。『悪神』様ですね。」

初めて聞いたソイツの声は、
凛々しく顔に見合うだけの美声だった。

「…そうだ…」

最早、返答をするだけで億劫なのだが、一応答えた。

「そうですか…。ならば、アナタ様に一つ提案がございます。」

「…提案？」

怪訝そうな顔で聞いてみると、
ソイツは少し間を開けて答えた。

「アナタ様も、我々の仕える神に…お仕えしませんか？そうすれば
…アナタ様は死ななくてすむので…」
「断る」

話の途中だったが、俺は断った。

「悪いが俺は誰かにへつらうのが大ツキライなんで…」

そう言つて、目を静かに閉じる。

「…本当にいいんですか？アナタは…死ぬことになるんですよ…」

「構わねーさ。」

再度質問して来る女に軽く答えを返す。

どうやら女は諦めたように目を閉じた。

『…残念だわ…』

うん？ 何か言つたかな？

「分かりました。では、神であるアナタに敬意を表して痛みのないようにお命をいただきかせてもらいます。」

そうやって、刀を構える雰囲気は伝わる。

チラッと目を開くと、周りはいつの間にか獄返人で溢れている。

脱出は……不可能だな。

「ンー!!ンー!!」

朝麻貴が遠くで涙を流しながら唸っている。

……朝麻貴……悪い。

俺、お前を助けられなかったわ……

右へ薙払われた白刃が俺の首に近づいて…

「ンーーーーー!!」

朝麻貴のうなり声とともに俺の首は…

ズシヤア!!

…

…

…

…

…あれ?

急に視界ブレたと思ったら、見慣れない風景に変わった。

具体的には、

血の雨風景から街の夜景が見えるくらいの高いところ…

『なぜ……お前がここにいる!?!』

下から先程の女の声が聞こえた。

それに対して俺の横から返答の音が聞こえる。

「ま〜ま〜、落ち着きなよシヤリ〜。てか、聞きたいのはこっちだよ〜。」

この和みを連想させる声…

…ふっ、笑っちまっつな…

「すまねー、サリア」

「ふん、悪神化してる時はアタシを『サリア』って呼んでくれるのね」

そう嬉しそうに何度も頷きながら、

俺の守護者…

『サリア・リフファープ・哀奈』が現れた。

… 4 守るべき者（後書き）

ホントウにスミマセン!!

今までスランプにより、しばらく書けませんでした!!!

でも、ネタも大分溜まったので次回からはちゃんと更新します。

では、また次回

… 5 最強無敵の一族の（前書き）

長いです。

後、多少グロイです。

… 5 最強無敵の一族の

こじでっし、

俺の守護者の『サリア・リフファープ・哀奈』を紹介しよう。

サリア・リフファープ・哀奈

性別は女

身長は142cm

体重は32kg

髪は光り輝くような薄めの水色で、
その髪をポニーテールにまとめ上げている。

顔は若干垂れ目で、幼さを残す顔だが、
美少女であることに変わりはない

服装はデカめのパーカーにカットジーンズとか
キャミソウルにロングスカートなど
いろいろな服装を持ち合わせている。

異世界出身で、
その異世界の最強の種族、『滅敵凶』の一族で
その一族の…落ちこぼれ…
…出来損ない…

と、何も知らない奴は言う…

本当に…そう思いこんでる。

本当の最強は……コイツなのに……

と……変わって、夜の町

「すまねー、サリア。」

「ふん、悪神化してる時はアタシを『サリア』って呼んでくれるのね〜」

リファアはそう言って、嬉しそうに頷いている。

「お前に助けられるとはな…」

契約前のあの時とはまるっきりの情景が逆だな…

今は俺がリファアに小脇に抱えられてる状態だ。

そんな状態が可笑しくて、軽く苦笑していると、

「もー！何の為の守護者だと思ってたのー！アタシはただの付き人じゃないのよ〜」

リファアはいつものほほんとした顔に、暢気な声で答えた。

ただ、いつもと違うのは…

「…サリア、何だその…バカデカイ刀は？」

今、リファアは今までに見たことの無いようなバカデカイ刀を右手に持っている。

…多分、獄返人の上半身を吹っ飛ばしたのもあの刀だろう。

「ああ、コレ？コレは私たちの一族に伝わる『宝刀・堯都神』たかつかみって言うんだ。かなりの業物なんで、アタイに触れると…掠り傷じゃすまないぜ！！」

「サリア、それは『俺に近づくと火傷するぜ！』だろ。」

そう冷静に突っ込みながら、リファアの持つその…堯都神（？）とかいう刀を改めて観察する。

その刀は、
刀身だけで約3mぐらいある大刀で、危ないぐらいにキラんと輝いていて、
柄は金色や黒の刺繍がおびただしく並んでいて、それをベースに、
様々な色の石や布で高級感を湧き出している。

伝家の宝刀（笑）をジロジロと見ていたら、
リファアが急に悲しそうな顔になった。

「…ゴメンね、蓮。アタシがそばにいなかっただけに……そんな傷を負わせて…」

本当に申し訳なさそうにこちらを見る。

そんなリファアに俺は…

「ふっ、お前が来てくれたから俺は生きてるんだ。だから、お前は謝る必要なんかねーんだよ。」

と、軽くフォローする。

「ありがとう、蓮。蓮って、優しいのね…」

するとリファアは、今まで見たことが無いような、優しさの溢れるような笑顔を俺に見せた。

そんなリファアに俺は、

「あー、まあ当たり前のことを言っただけだ。」

と言いながら、恥ずかしいから明後日の方をみる。

すると、俺が向いた報告から真っ赤な三日月みたいなモノが、こちらに近づいて来る……

そしてまた、視界がブレる。

今度リファアが降りたのは、一般的な電柱の上だった。

「全く、邪魔しないでよシャリ」

リファーがちょっと不満そうに頬を膨らましている。

『クソ！』

遠くからそんな声が聞こえ、
さっきよりやや大きめなああの赤い三日月が迫り来る！

だが、

「ムダだよ」

というリファーの声とともに、視界がブレる。

今度降りたつたのは銭湯の屋根みだ。

だが、今度は違かった…

俺たちの5m前ぐらい前に、アノ銀髪の少女がいた。

「捉えた！『緋斬・天血傷風』！！！」

至近距離からアノ斬撃が迫り来る。

さすがにリファアも避けれないと感じたのか、
右手に持っている刀を構えて、

「ウザいよ…」

これも、今までに見たことの無いような鋭い目つきで、
ヒュンッ！

と風を切る音とともに左から右へ、刀を振るった。

すると、

『ドガアアアッ！』

と、緋色の斬撃とリファアの何かがぶつかり合い、
激しい爆音を立ててどちらとも消滅した。

リファアはその光景をつまらなさそうにみている。

対する女は、

「……………!!」

驚愕して、リファアを有り得ない物を見るような目でみる。

何を驚いてんだ、と俺が怪訝そうな顔をしたら、
ソイツは驚愕の顔を緩めないまま、リファアを睨みつけた。

「何故だ！何故出来損ないの貴様がそのようなことができるのだ！」

今にも暴れ出しそうなソイツにリファアはあえて挑発的な態度を取った。

「え、何のこと？アタシわかんない。テヘ！」

ドジっ娘のように舌を出すリファアに、女はキレ口調で答えた。

「何故貴様のような出来損ないが…私の全力で乗せた神力の斬撃をただの刀の風圧だけで相殺出来るのだ!？」

俺は、その一言がイマイチ飲み込めなかった。

だって、矛盾しているのだ。

リファアはこの前、一人の男にズタズタにされていた。

その男を俺が軽くぶっ飛ばした訳だが…

なのにリファアは、
油断や満身創痍もあったが、『俺よりも強い奴』を圧倒しているのだ…!

矛盾している。

俺より弱い奴が、俺より強い奴を圧倒しているなんて…！

「ふっふっふ〜ん！分かってないな〜2人共〜」

怪訝そうな顔をする俺を、銭湯の屋根の上にゆっくりと寝かせて、リファアは偉そうに胸を張った。

…ペタンコな胸を、な…

「それは関係ないでしょ。」

「何故聞こえた！」

あまりにもビックリして大声でツッコむ俺。

だが、

「…ッガハ！」

ただでさえ致命傷といっても過言じゃないぐらいの大怪我をしていたのに騒ぎすぎたからか、俺は大量に血を吐いてしまった。

「蓮！大丈夫！？」

リファアは驚いて俺に近づき、俺の近くに跪いて堯都神を脇に置き、すぐさま空いた両手で患部に手をかざす。

するとリファアの手から青白い光が灯って、俺の体の痛みが引けていく。

患部を見ると、

先程までザックリと開いていた傷口が、まるで粘土を組み合わせていくが如く治癒していく。

だが、それを見逃す程、向こうもバカではないみたいだ。

「隙あり!」

シヤリ〜とか呼ばれている女が素早い動きで無防備のリファアに近づく。

それに対するリファアの対応は、

「…邪魔。」

右手は患部の再生の為に俺の胸にかざしながら、空いた左手で堯都神を掴み、右から左へ雑払う。

ガキイイインツツ!!

と激しい金属音が辺りに鳴り響いた。

そして、

「グハッ!!」

と、シャリ〜がリファーに押し負けて、
近くの壁にぶつかる。

ドガアアアンツツ!!

シャリ〜がぶつかった壁が、
積み木の城みたいにバラバラと崩れ落ちていく。

そしてその間に、
リファーのおかげで俺の傷口は大体癒えた。

「そっいえば、シャリ〜は言ってたわよね〜。何で出来損ないのア
タシがそこまで出来るのかって…」

俺の傷を大体治したりリファーは立ち上がり、
刀を右手に持ち替えて肩に担ぎながら、シャリ〜に向かってゆっく
りと近づく。

リファアは自分の質問に自分で答える。

「それはね…『滅敵凶』の一族の中であって、他とは違うのよ。」

「…何？」

土煙が晴れて、苦しそつに地面にうずくまっているシャリーがいた。

だが、リファアは刀を構え始める。

それとともに、質問の内容を答える。

「アタシは、『比類なき最強の一族のおちこぼれ』なわけで、強さは『エリート』の一族のエリート』ぐらいなんだよ。」

リファアは今の言葉をつまらなさそつに、
本当につまらなさそつに答えた。

「なあ、リファア。んじゃあ、何であん時はボロボロになってたんだ？アノ男は俺が負けたコイツより断然弱いだろ？」

いまだに痛みで立ち上がれない俺は、
仰向けの姿勢のまま遠くにいるリファアに聞いた。

「ああ……あのときは……完全に油断してたし、何よりも……その……
少し、落ち込んでたからかな……」

「……………」

……………完全に俺のせいだった……………

「……すまん……」

「いや、違うんだよ……あのときはアタシの言い方が悪かったし、
正論言われて傷ついたメンタルも弱かったただだから、蓮が悪い訳
じゃないんだよ……？」

リファアが慌ててこちらを振り返って弁明する。

ははは、と俺が呆れ顔で笑いながら見ていたら、
またリファアが鋭い目つきになった。

「話してる途中だ…」

リファアはそう言いながら、
振り返る反動を生かしてローリングソバットをする。

するとまた

ドガアアアンツツ!!

という破壊音がなって、
近くの壁が崩壊した。

…予想だが、

大方、

またシャリーがリファアの間隙を突こうとして、
逆に吹っ飛ばされたのだろう。

…懲りねーヤツだ。

そう思いながら、崩壊した壁の方を注視する。

「けど安心して。あなたは殺さないわ。あなたはアタシが死なない程度に痛みという痛みを与えてあげる」

サラリと危ないことをいいながら、

リファアはシャリーに向かって駆け出す！

するとシャリーが急に不敵な笑みを浮かべた。

「つまり貴様は…不意打ちが苦手なのだな…」

その言葉と同時に、

リファアから八方の方向から刀を構えた男八人がリファアに向けて突進して来た！

距離は3m！

これじゃあ…避けられない！！

「サリア！危ねー！！！」

頭より体が先にでた…

俺は、契約前に使った瞬間移動でリファアの真上に移動して、強引に床に押し倒す。

そして………

グサッ！！！！

複数の何かが刺さる音がした。

リファアがゆっくりと顔を上げる。

リファーが見たものは……

「…………グッツ！」

体中、刀が刺さって血を流している

…俺がいた。

「レEEEEEEEEンッ!…!!」

リファアの悲痛の叫びが広がる。

ズボッ!…と何かが抜けて、
俺はリファーに寄りかかる。

「レン!レン!しっかりしてよ!?!レン!…」

俺の名を何度もよびながら、リファアが両手で患部に手をかざすが…
色々なところで穴が開いてて…治療が間に合わない。

けど、そんな事より…

「サリア…、怪我…ねーか？」

お前の方が心配だ…

「アタシは大丈夫よ！！蓮も…今すぐ治すから！！」

そう言いながら、手に力を込めるが…対して変わっていない。

「サリア…、あまりしゃべれねーから一言で言わせてくれ。」

アニメとかだったら、結構時間とかあって色々言えるのに…

まあ、いつか…

ちゃんと伝われば……

「サリア……」

「レン!!変なコト言わないでよ!!」『俺は死なねー』とか、そんな事言つてよ!!お願いだから……」

涙でかなり歪んだ顔で懇願するリファア。

……ゴメンな、リファア……

短い間だったけど……

最悪な出会いだっただけど……

それでも、

一緒にいた時間は…楽しかったぜ…

「俺の守護者で…ありがとう。」

…

…

…

…

…

…

「…蓮？」

あれ？

返事してよ…

.....

.....

どうして……こうなったんだろうっ？

アタシは……もっと、

蓮とお話がしたかった。

蓮とわかり合いたかった。

そして……

蓮を……もっと好きになりたかった。

あの日、バスで蓮を見たときからの……ささやかな夢……

ビルの屋上で感じた……確かな恋心……

一緒にいるだけで、
今までに味わったことの無いような安心感と幸福感。

優しさと温かさを持っていた、
アタシの大切な人……………

命なんかよりも、ずっとずーっと大切な人。

それを……………

奪ったわね……………

「何だ…様子がおかしい？」

一番後ろにいる男が声を上げる。

…アンタからでいいか……

グサツ！！！！

何かが刺さる音がして、
『シャハナティハス・リゼン・プラニクル』を含めた八人が振り返る。

ただ一人、振り返らない男がいる……

そう、

その女性は、悲鳴にうつとりとした表情をして、男を串刺しにしたまま上空に投げ捨てた。

男は宙に高く上っていく。

するど、

ヒュヒュンッ！

風を切る音がしたと思ったら、

…男の体が四散した。

「…なっ！！」

シャハナティハス達の驚愕の声と、息を呑む音が聞こえる。

恐怖で顔を歪めるシャハナティハスたちになのか、

はたまた、

守れなかったアタシを見てなのか、

笑っていた……

「ハア、またなってしまいましたか。全く、せっかく封印してたのに……」

そういう女性の声は、
成人女性のような艶のある、誰もが振り返るような美しい声だ。

「…何なんだ。貴様は一体……何者なんだ!!!？」

シャハナティハスは声を荒げて質問する。

シャハナティハスの目に映る、その女性は、

太ももまで届くような長さの、月の光に照らされて輝く神々しい金色の長髪に、

汚れやシワが一切見つからない、高級感溢れる純白のドレスを纏い、

ドレス越しに見える体は、

すらっと伸びる手足に右手で持っている大刀を肩に担いでいる。

そして、きつちりと絞られたウエスト、

メロンを詰めたような、大きくて魅力的な胸が印象的で

刃物のような鋭い、金色に煌めく目に色白の肌。

そのような口紅をしたような肉質溢れる美しい金色の唇を兼ね備えた、

何者をも魅了するかのような、

完全なる美女がそこにいた。

「わたくしが何者か…ですって？」

女性は不思議そうに首を傾げる。

「では、アナタに3つのヒントを差し上げましょう。」

女性は、含み笑いを浮かべながら
開いている左手の人差し指から薬指の3本を立てて突き出す。

「1つ目、わたくしは女です。」

…それぐらいは分かるんじゃないかな？

「2つ目、アナタたちと同業者です。」

確か、シャリ〜も神様の守護者だったわよね…

そして……

「そして3つ目、わたくしは冥界最強の一族、『滅敵凶』のおちこぼれ。」

「……………」

ここまできて、シャリ〜もようやく気づいたみたいね。

そう、

シャリ〜の目の前にいる女性は……………

「わたくしは、一族のおちこぼれの烙印を自ら押した。『歴代、滅敵凶最強』の女。その名も『サリア・リフファーブ・哀奈』ですわ。」

シャリウの目の前にいるのは、

紛れもないアタシ……

真の姿を表した、

サリア・リフファーブ・哀奈だった。

… 5 最強無敵の一族の（後書き）

真の姿を表したりリファアが暴れます。

そして、

この章の佳境に入っていきますので、

期待して、お待ち下さい。

∴ 6 最強無敵の実力（前書き）

2ヶ月振りの投稿。

久しぶりだな〜

… 6 最強無敵の実力

6月のある真夜中

日本の片田舎のとある町。

その片田舎の住宅街の人気の無い道で…

一人の金髪の女性が立っている。

だが、

周りの状態は異常だ。

住宅街に並ぶコンクリートの壁は、余すことなく全て血に染まり、側溝には腕や足が落ちていて、汚水と血が混ざり合って見たことのないおぞましい色を出し、

看板には、謎の光の棒によって、腹に大穴が開いた人が磔にされて、

様々な状態の死体があちらこちらに打ち捨てられている。

ある者は、首がなく…

ある者は下半身がなく…

ある者は顔が原型が分からなくなるぐらいに潰され…

ある者は内臓や脳や骨が丸見えの状態で、

……死んでいる……

ただ、
そこにたたずむ美少女だけが、

誰もが驚愕し、戦慄して恐怖を隠しきれないようなこの状況下で、

笑っている……

元々は雪のように白かったはずの純白のドレスや顔を、
真っ赤な血で染めながら、

静かに、清楚に、美しく、

笑っている………

【…住宅街にて…】

「ハア…、弱すぎますわね…」

私は、^{わたくし}辺りに広がる一面の惨状を見つめて嘆息する。

周りは全て血により真っ赤に染まっていて、いくつもの死体が落ちて
いる。

獄返人は殺せばまた地獄に落ちるのだが、

守護者は違う。

八人の守護者は皆、様々な状態で死んでいる。

『…全く、弱すぎて話になりませんでしたわね……』

ハア…、とため息を再びもらす。

…けど、

そんな状況下で、生きているのは私だけではありません。

「ハア、ハア、ハア、ハア、」

私の目の前には、

体中傷だらけで血を流し、痛みで涙目になっている、一人の少女が、

シャハナティハス・リゼン・プラニクルが地面にへたり込んでいます。

「まだ、あなたの罰は終わっていませんよ。」

そう言いながら、堯都神を持った右手の逆の左手を空にかかげる。

すると、

上空には、いくつもの光の円状の柱がゆっくりと私の周りに集まる。

その光の棒は、6 mぐらいの大きさを私の体のように金色に輝く棒。

それを私の目の前に無数に展開します。

目的は…

「かいじょうしんちゅう
壊城神柱」

そう呟くと同時に私の目の前にあった柱が彼女に向けて飛来する。

彼女は、時速60 kmで迫り来る光柱を、全身の力を振り絞って使
い、

精一杯宙に飛んで光柱を避ける

だけど、それでは逃げた内に入らない。

「ひとこへん
庇吐鼓鞭」

私は、水色に染まった人の腕ぐらいの太さ三つ編み状の縄みたいな鞭を展開する。

展開された鞭は、私の右腕に軽く巻きついて、そのまま蛇のとぐろのように、私の足元に置かれる。

その鞭を、私は遙か上空にいる目標へ狙いを定め、鞭を振り落とす。

ヒュンッ

という音が聞こえたと思ったら、

バアガアアアンツッ!!

辺りの建物を巻き込んで鞭が対象を地面にたたき落としていた。

「ガハッ……」

シャハナティハスの悲鳴が聞こえた直後に私はそこに降り立つ。

シャハナティハスの首をガシッと掴み、こう告げる。

「じゃあ、アナタには10000裂きの刑に処しましょうね。」

凄惨に歪む私の笑顔に恐怖を満たすシャハナティハスの顔を見て、私の心が癒される。

もしこれ以上の恐怖に歪む顔を見たら、どれぐらい心が癒されるのだろうか？

そう思うと、自然と右腕が動く。

右手に持つ、宝刀・堯都神の刀身が真っ直ぐと天に伸びる。

「あ……あぁ………」

シャハナティハスの瞳から大量の涙がこぼれ落ちる。

それだけで、私の顔は激しく歪んでいく。

「キャハハハハハハハハハハハアアアアア……！」

嬉声が闇に染まる住宅街を包む中、宝刀・堯都神の白刃が月光を反射してキラリと怪しい光りを放つ。

これを合図に、『罰』が始まるかのように……

「た、助けて………」

シャハナティハスの震える声が微かに響く。

だが、誰も助けにこない。

「じゃあ、いきましようか。」

ニンマリと歪な笑顔でシャハナティハスを見つめる。

シャハナティハスはもう顔を涙でたくさん濡らしながらも、なお助けを求める。

「誰か……助けて………」

この声は……

「レン？」

彼の名を呼び、触られた右手から徐々に視線を上げていく。そうすれば、きっと私の後ろにいるレンがいる。そう思つて振り返つた。

私が振り返つた所にいたのは、

「とりあえず、朝麻貴は救出したから安心しろ。……てゆうかどうしたらこんなに見た目が変わるんだよ？」

私の後ろにいたのは、纏つていた漆黒の浴衣がずたずたに敗れてその破れた所から見える肌からは血で染まり、如何にも動ける体ではない。それなのに、動けない体を無理やり動かして私を止めてくれた。

レンが……私を止めてくれた。

「レエエエエン！！！！」

「ふぐあああ！！！」

私はシャハナティハスをほつたらかしにしてレンき抱きついた。

もう……離さない！

「いや、離せ！！……と言うか、離してええええええ！！！！！」

いきなりレンの悲鳴が聞こえたと思ったら、私の腕を回しているレンの首や腰からバキボキゴキベキと骨が軋むような、骨が折れたような音が鳴っていた。

慌ててレンから体を離す。

するとレンは涙目になって、「危うく二度目の昇天を迎えるところだったぜ……！！」と私をキリッと睨みつけてきた。

今のことは完全に私が悪かった。

「申し訳ありません、レン。」

私は体を腰から90度に曲げて謝罪をする。

すると地面にポタポタと小さな雫が落ち、次第に小さな水だまりができていた。

「でも、私……嬉しくて……！！」

次第に水だまりが大きくなる。

私の硬く瞑った瞳から、とめどない涙が溢れかえる。

レンが生きてて良かった……

本当に、それだけのことなのに涙が止まらない。

いきなりだった。

いきなり右手をレンに思いっきり引っ張られて前のめりに倒れそうになる私。

その私の体を包み込むように優しくはあるが力強く、レンに抱きしめられた。

「えっ」

いきなりの事で流れ続けていた涙が止まった。

「そうか、そんなに心配かけちゃったか。ヤッパダメだわー、オレ。」

体が密着する事によりレンの体温が伝わってくる。

……温かい……

その温かさが心の底から私を包み込む。

「んだからよ、今から落とすし前つけてくるわ。だけど手は出さねーでくれ。静かに待っててくれや。」

涙を流したままの顔を上げてレンを見る。

レンは氷のように冷たいような、けどどこか聖母のように慈愛に満ち溢れた優しい目で私を見つめていた。

ああ……

そういうところが卑怯なんだよ。

その静かな瞳に写る強い意志が、私の心を揺さぶる。

そうだった……

私はこの『冷たいと錯覚するような優しさ』に惚れたんだ。

初めてバスの中でレンから感じた、『絶対的な強さからくる冷たさ

に潜む、無限の優しさ』に、私は惚れたんだ。

未だにその強さや優しさは測りきれないけど、私は知っている。

朧火蓮はその冷たすぎる強さから、その優しさに気づいてもらえないと……

「サリア、あの長ドス持つてるか？」

レンが私を抱きしめながら耳元で囁く。

私は黙ってレンの所望の物を差し出す。

「ありがとう。ところで、この刀の銘は？」

私の肩を持ち軽く引き離れた後、刀を受け取りながらレンは聞いてきた。

私はそれを一言で告げた。

「神刀・『白闇の罪刀』と申します。」

「へー、カッコいいじゃん。」

そう短絡的に感想を告げて神刀を浴衣の帯にさし、私を抱きかかえてシャハナティハスから距離を取る。

大体シャハナティハスから50mぐらい離れた所の屋根上。

先程私がレンを寝かせたところで私を下ろし、私に背を向ける。

「待ってる、すぐに終わらす。」

私に背を向けたままレンはそういつて歩き出す。

その大きな背中を、私は黙って眺めていた。

∴ 6 最強無敵の実力（後書き）

次回で『友or転校』は終わります。

ではまた次回！

… 7 悪神としての意志

『オレはダメだな。一度ならず二度も女を泣かせるなんて……』

内心でそう自らを毒づき、周りの光景を冷ややかに眺めながら銀髪少女に向かって静かに歩く。

『この惨状を作り出したのはリファアだ。だけどその原因を作ったのはオレだ。』

その事実を感じながら、何も言わずに歩く。

辺りが血に染まり、無数の惨たらしい死体に囲まれ、血でできた水だまりをピチャピチャと水音を立てながら歩く。そして、

「よう、おまえの名前は何だ？」

地面にへたり込む銀髪少女を見下す。

少女は涙を流しながら、ポカンとした表情で俺を見つめている。

「聞いてんのか？」

少しだけ神力を強めて凄む。

神力の影響でオレの髪がより黒く染まり、怪しくて不吉な黒い光を醸し出していた。

その間、シャハナは神力に影響されてか体に電撃が走ったみたい
に体をぶるりと震わせ、背筋を伸ばしてオレを真っ直ぐに見つめた。
「申し遅れました。」

私はシャハナティハス・リゼン・プラニクルと申します。」

ソイツは体を震わせおどおどとビクつきながらも、しっかりと一文字一文字を聞き取りやすいハッキリとした綺麗な声で俺に伝えた。

「長いな……略してシャハナでいいか？」

「は……はい。」

シャハナは小さく頷いて視線を地面に向ける。

大方、さつきオレが コイツの手下にズタズタにされたことに関して今頃罪悪感を感じているのだろう。

だが、オレは引かない。

敢えてシャハナに顔を近づけ彼女の顔をよく観察出来る状態を作る。

対するシャハナは顔を恐怖で歪まないように必死に耐えながらオレを見つめ返す。

とりあえず、オレは確認したかった。

「シャハナ、お前……オレに何か言うことはないのか？」

少し尋問するような低い声色と上から見下すように睨みつける。

シャハナは当然、ビクツと体を震わせたが、何かを必死に考えて、やがて口を開いた。

「ありがとうございます。」

「……………」

シャハナが何で感謝を述べたのかがいまいち理解できなかった。

だがシャハナは構わずに続ける。

「アナタが私を助けてくれたおかげで、私はサリア・リフファープ・哀奈の陵辱を受けずにすみました。

後はアナタにひと思いに私を殺してもらえば諦めがつくのです。」

「……………」

突然何を言い出すかと思えば……

「さあ、私を殺してください。

私を殺して……私を仲間の本に送って下さい。」

そう告げて、シャハナは正座して瞳を閉じる。

如何にも、『覚悟を決めた』奴の姿だ。

それに俺は、

「分かった。」

了承の言葉を告げて、腰に差してある『神刀・白闇の罰刀』の柄をガツチリと掴み、腰から抜き取る。

「何か言い残す事はあるか？」

低く冷淡な口調でシャハナに尋ねる。

彼女はただ静かに、こう言った。

「もっと……生きたかったな……」

その一言だけでシャハナの瞳から涙が流れ落ちる。

彼女は顔を赤く染め、泣き声を押さえようとして静かに嗚咽を繰り返す。

その光景に俺は目を細め、静かに神刀を持った右手を天に掲げた。

そして、振り下ろす。

真夜中の住宅街に、

ヒュンッ

風を聞る音と、

ゴスッ

肉を何かが打つ鈍い音と、

「ッ イ@ 打 いッッッ!?!?!?」

最早悲鳴にもならないような少女の奇声が響き渡る。

そして頭を押さえて苦しがる少女をつまらなさそうに鼻で笑い、『鞘に包まれている』神刀を振り下ろした状態から肩に担ぐ。

「お前は分かってねーなあ、ああん？」

わざわざしゃがみ込み、顔の位置ををシャハナに合わせる。

シャハナの顔は？が浮かびそうなくらい混乱している。

そんなシャハナにイライラしたが、オレは神力を弱めて威圧感を抑えて静かに彼女を見つめて諭す。

「お前が言わなきゃいけないのは『ごめんなさい』だろ？」

「……………えっ？」

シャハナは顔を上げてオレを見る。

……………理解出来てねー顔だな。

ハアとため息を一つ漏らしてからオレは言っただけ。

「オレはどんな挑戦にも受けてやるけどよ。いきなり襲うのはアウトだ。」

……………それに、

そこでオレは再び目を細めて神力を先程より多く垂れ流し、シャハナを威圧する。

シャハナがヒツと怯えて身を縮こまるぐらいに。

「お前は『関係ない奴も巻き込んだ』。

それだけは絶対にやっちゃいけない。」

その辺は理解しとけよ？

次は……無いぜ。」

これだけは許せなかった。

今までと違う生活に慣れずに他人を拒否し続けていたオレをいろんな所でサポートしてくれたアイツを……

たった一回、イジメから解放してあげただけのオレに、いつもいるんなことで手を焼いてくれた。

そんなアイツを……怖い目に合わせた……

それだけは、黙って見逃せなかった。

「……朝麻貴、来い。」

遠くの電柱に隠れている朝麻貴に呼びかける。

朝麻貴は小走りでオレの隣に来て静かにオレを見上げる。

オレは朝麻貴が隣りに来たのを確認してシャハナに目で合図する。

それに対してシャハナは慌てて両手を地面に着き静かに頭を下げる。

いわゆる土下座だ。

そんな体勢でシャハナは泣きながらオレと朝麻貴にこう言った。

「本当に……申し訳ございませんでした……!!!」

シャハナの嗚咽混じりの誠意を感じたのか、朝麻貴がシャハナに駆け寄り「大丈夫ですよ。私は怒ってませんから。」とハンカチを渡す。

オレはその光景を黙って見つめ、シャハナが泣き終わってから行動を開始した。

「二人とも、オレから少し離れてくれ。」

そう言っつてリファーも呼び、三人で固まっつてもらっつ。

さてと……んじゃ、

「悪神の凄さを見せつつけてやるか。」

肩に担いだ神刀を両手で持ち、右手で鞘から刀身を抜く。

神刀は刀身と鞘が擦れる音など全く立てずに無音で刀身が露わになる。

そして、その刀身はなんと、闇夜に染まる住宅街に『真っ白に』輝いた。

まるで遙か頭上で光り輝く白い月が今、白闇の罰刀に宿っているようだ。

光り輝く神刀を地面に刺し、とある詠唱を始める。

「黒き闇を呑む白色の闇よ、我が力の礎となれ。」

白闇の罰刀から輝く白い光がアスファルトの地面に白色で幾何学的な円上の線を描く

「我が名は悪神・隴火蓮。

我が力よ、悪神の神力よ！

時を呑み込み理を掌握せよ！」

幾何学的な紋様が強く輝き始める。

まるで何か大いなる力が何かを引き起こそうとしているみたいに……

「レン！ダメよ！！」

それを発動するにはアナタの神力が足りなさすぎる！！

アナタ、死んじゃうわよ！？」

リフファアの叫び声が聞こえるが無視して詠唱を続ける。
そして詠唱が終わり、光が辺りを支配していき……

「現実よ、我にひれ伏せ。

『万象転回潔白傷』！！！！」

白闇の罰刀を根本まで地面に突き込んだ。

その瞬間、アスファルトの地面から真っ白な光が輝き溢れてリフ
アー達の視界を奪った。

…

…

…

眩い白光が私たちの視界を奪って30秒経ち、恐る恐るまぶたを
開く

そして眼前に広がるのは、何の変哲もない住宅街だった。
血によって真っ赤に染まった壁や、血溜まりの地面は血の後を感
じさせずに灰色や黒の色のままで、人が礫になっていたはずの看板
は何事もなく

8体もあつた無惨な死体は無く、変わりに……
「あれ？おれ達何で生きて……」

8人の若い男女が地面に寝そべっていた。

けれど、そんな事より私はあることが心配だった。
慌てて私はある人を捜す。

そして……見つけた。

その人は、両膝をつき、神刀・白闇の罰刀を祈るようにして手で押し込んだまま

『全身血まみれ』で全く動かない。

全く動かないまま夕日のような真っ赤な髪を風に靡かせている漆黒の浴衣を着た大柄な少年、『朧火蓮』を見つけた。

「レエエエエエーン!!!」

私は必死にレンに駆け寄る。

慌ててレンの顔を覗き込むと、レンは白目のまま、目や鼻や口や耳から血を流していた。

だけど、口元に手を当てて確認したけどレンは生きている。
今早くに治療をすればレンは助かる。

……それなのに……

「悪神だ！殺せえ!!!」

「見ろ！明らかに弱ってるぞ!!!
今ならやれる!!!」

「滅敵凶の小娘ごと叩き潰せえええ!!!」

シャリーの僕達しせえが武器を構えてレンにトドメを刺そうと突進してくる。

……もう我慢ならない……

「ザコ共が、一度ならず二度までもレンを狙うなんて……」

「三度目はねーんだよ……」

右手を天に翳し、力を込める。

そして私の体から溢れ出した水色の粒子が一瞬にして固まり、全長3・5メートルもある大きな刀、通称、『宝刀・堯都神』を展開する。

そして堯都神を持った右手を軽く振る。

たったそれだけの行動で斬撃による風圧が巻き起こり、シャリーを覗く8人が無様に吹き飛ばされた。

「グアアアアアア！！」

「ウエツ！！」

斬撃から放たれた台風並みの風圧により、シャリーの僕達の半数が再起不能になる。

だが、残りの半数はよろよろと立ち上がり、再び刀を構えて突進して来た。

……どうやら本当に殺さないと分からないみたいだね……

「そつちがその気なら……本当に、殺すね。」

あいている左手で右手首を掴み、神力を開放する。

すると、堯都神を中心とした私の体から金色の粒子が火山の火柱のごとく放射され、閑散として住宅街が神々しい金色の楽園と化した。

「バ、バカな！！？」

「こんな神力が……！！」

「神でもない守護者がなぜここまでの神力を持つてるんだ！！？」

シャリー達の僕が私の神力におののき、恐怖して後ずさる。

けれども、私はやめない。

不完全な状態に戻っても、

ステータスが落ちこぼれレベルに落ちぶれても、
……『最強の一族』を怒らせた事を、地獄で後悔させてやる……

「こんじき金喰……」

粒子化した神力を圧縮し、ある形に固定し始める。

「黄龍嚙滅の型……『憤怒の龍神・破擦滅』……!」

私の金色の粒子が固まって出来たのは、全長200メートルを優に越す程の巨大な龍だった。

しかも、それはただの龍じゃない。

その龍は『黄龍』。

四神の長と呼べる幻の中の幻の龍で、その黄龍の中でも神々しすぎて人には認識されていない『憤怒の象徴』の龍神を擬似的に召喚した。

「さてと……んじゃ、滅敵凶の『最強の一撃の一つ』をお見舞いしてあげようかしら。」

私は堯都神をまた縦に真っ直ぐと伸ばす。

黄龍はそれに従いうねりながらいつでも突撃出来る大勢に入った。

だが、その一瞬の隙で

「神層天壁!!」

シャリーが自分の僕と私に割って入り、自らの僕とシャリー自身の間で高度な神盾を張った。

「プラニクル様!何を!」

「まさか、お一人で戦うつもりですか!」

「無茶です!!!おやめ下さい!!!」

殺されてしまいますよ!!!」

シャリーの僕達が喚く中、シャリーは私に背を向けて自らの僕達にこう言った。

「私が責任をとる。」

だから、あなた達とはここでお別れよ。」

シャリーの唐突な宣言に僕達が言葉を失った。

その様子を眺めながらシャリーは静かに僕達に彼女の思いを伝える。

「短い間だったけど、アナタ達といた時間は本当に楽しかったわよ。ありがとうね……。」

そしてシャリーは再び私に振り返って自らの刀を構え、神力を圧縮し始める。

どうやら私と戦うみたいね……

「やめておきなよシャリー。」

いくらエリート中のエリートのアナタとは言え、滅敵凶の一族の私に勝てるわけがないじゃない。

大体あなたは強いけどまだ守護者になって1ヶ月しか経ってないじゃない。

さっきみたいにボロクソになるだけよ？

だったら後ろの結界を解いて一斉にかかってくれば勝機があるんじゃないかな？」

「その手には乗らんど、サリア・リフファープ・哀奈。」

貴様は大方、今の貴様では結界を打ち破れんから私に結界を解かせて皆殺しにするつもりだろうがそうはさせん。

死ぬのは……私だけで充分だ……！」

シャリーの言葉の最後に力がこもり、彼女の体から緋色の粒子が

飛び散る。

だけど私の金色の神力の中では脆弱なものだ。

「まあいいわよ。」

とりあえず、あなたを殺せばレンを殺そうとしてるバカでクズなクソ神共も分かるでしょ。

『コイツに手を出したなヤバい』ってね。」

私は内心、皆殺しにできなかつた事が残念だっただけどとりあえずシャリーを殺すことで譲歩する。

今のスペックの私にはどんな技を使ってもあの神盾を破る事は出来ないからね……

「だからと言って、私も無意味に死にはしない……

腕の一本ぐらいは貰うぞ!!!」

シャリーはいつの間にか神力を圧縮し終え、既に刀を構えて斬撃を放とうとしていた。

それを見ながら私も黄龍を突進させるように刀を振り下ろす。

「鮮緋斬・大三日月の血緋荒神!!!!」

「金喰……!!!」

シャリーの日本刀から大きな緋色の三日月状の斬撃が、

私の振り下ろした堯都神のから黄龍が発せられ、ぶつかり合った。

否、黄龍が一瞬で三日月を『呑み込んだ』。

「あっ……」

シャリーの間の抜けた顔が一瞬見えたと思ったら、瞬く間に黄龍がシャリーを呑み込んだ。

ドオオオオンと激しい地響きとアスファルトが飛び散り、辺り
一帯を再び惨状にした私の一撃。

……最早、生死など確認する必要が無いわね……

「あのなあ、リファア。」

お前はオレが何のために地形を直してやったのか分かってんのか
？」

その言葉を聞いた瞬間、ゾクツと体中の毛が総毛立った。

だって有り得ない。

その声の主は本来ならまだ白目を剥いて気絶しているはずなのだか
ら……

けどやはり確認がしたくて私はゆっくりと首を後ろに向ける。

そして私の背後には、

悪神化により夕陽のような赤色とは違った、黒く何物をも染めてし
まいそんな綺麗な黒髪黒眼になり、

右手に白く輝く神刀を持ちながらシャリーを抱き抱えている私の神
様、

朧火蓮がいた。

「全く、オレがせっかく元に戻してやったのをまた壊しやがって。
後でお仕置きだからな？」

レンは意地の悪そうな笑顔を私に向ける。

……全身血まみれで体が多少痙攣している状態で、だけどね。

「……な、何故なのですか……」

レンの腕の中でシャリーは小さな声で呟く。

「アナタは何故二度も私を助けてくれたんですか……
私はアナタを、殺そうとしたのですよ……!!」

レンの腕の中でシャリーは震えている。

「どうやら今までのレンの行動と自らの行動の事を思い返して泣いているみたいだ。」

「……そりゃあそうだ。」

「シャリーは獄変人やら人質やら僕達を使ってレンを殺しに来たのに
対して、レンはシャリーを許すどころかその僕達を生き返らせてあ
まつさえ自らを殺そうとしたシャリーを二度も助けたのだから……」

「わ、私は……アナタを殺そうとした!!」

「アナタを殺すために卑怯な手段を選んで実行した!!」

「……それなのにアナタは私を助けてくれて、私の大切な仲間を生き
返らせてくれた!!」

「

シャリーの目からとめどない涙が溢れ出す。

「きつと今シャリーは罪悪感に押しつぶされてしまいそうなのだろう。」

「……アタシにも経験があるから分かる。」

「滅敵凶の歴代最強の娘として残虐な生活を送っていたアタシには分
かる。」

「罪悪感には本当に自らを焼き尽くす劫火だ。」

「そんな劫火を消し去ってくれたあの人は、こう言ったんだ。」

「私なんかのために命を削って……!!」

「いつそ私を殺してしまえば私は楽につき!!」

「バアーカ。」

レンがシャリーの頭に軽く頭突きをかまし、黙らせる。そしてシャリーを抱き抱えたまま顔を唇が触れるか触れないかというぐらいギリギリの距離に近づける。

「確かにお前はいけないことをした。

けどさ、お前……」

『やり直せるならやり直したいだろ？』

あはは……

ヤツパリ、レンはあの人と同じことを言うんだね。

「で、でも私にそんな資格は……」

「やり直すチャンスは誰にでもあるんだぜ？」

シャリーの言い訳をレンはバツサリと切り落とす。

そして、レンは精一杯見得をきった。

「オレは悪神だ。

『悪しき者を善に導く』のがオレの神としての仕事だ。

オレは全ての悪に救済を与えてやる。

……勿論、お前にもな。」

「……………」

シャリーは驚愕の表情を浮かべて、再び涙を瞳に浮かべ始める。

そんなシャリーにレンは珍しく優しい顔を見せた。

「オイオイ、せっかくのかわいい顔が台無しだぜ？

そこはわらえよ。」

レンは優しくシャリーを地面に下ろし、指で彼女の涙を拭う。

シャリーは涙こそ止まったが、いまいち罪悪感の拭えない顔をしていた。

「私は……どうやって罪を償えばよいのですか？」

目を赤く染めながらシャリーはレンの返答を待つ。

それに対してレンは静かに目をつむり少し考える仕草をして、目を開いてシャリーにこう言った。

「シャハナ、お前……オレの守護者にならないか？」

……はあっ？

「悪神様、それは一体どういうことなのでしょう？」

シャリーは驚きの表情のままレンを見る。

だがレンはそんな事もお構いなしにシャリーに告げる。

「初めにオレを勧誘したのはお前じゃねえか。

なら今度はオレがお前を勧誘するだけだ。

償いはオレに1ヶ月奉仕する事でチャラにしてやるよ。」

レンはそう言ってシャリーに背を向けて歩き始める。

「明日の深夜12時に神鉈町のドデカい廃ビルに来な。

そこでお前の答えを聞かせてもらう。

それまでは好きに過ごしな。」

アタシは慌ててレンに追いつき、フラフラと今にも倒れそうなレンの支えになる。

シャリーは地面にへたり込んだままポカンとして動く気配がない。

となると、後動けるのは……

「……待つて、臙火君！」

レンが必死に助けだそうとしていたこの茶髪セミロングのお淑やか大和撫子だけだ。

「朝麻貴……」

レンがその少女に体を向ける。

まあ、私とレンじゃあ身長が45センチぐらい違うからイマイチ支えになっているか分からないけど、

私はちゃんとレンがソイツと話しかけやすいように移動する。

「……臙火君……」

朝麻貴と呼ばれる少女が再びレンの名前をよび、レンを見つめる。

流石のアタシも、

この二人の会話に水をさすようなことはしたくない。

私はレンの杖として黙って二人の幾末を見つめることにした。

… 7 悪神としての意志（後書き）

三週間振り……かな？

とりあえず、次回こそ第二章の終わりです。

そして報告が一つあります。

『悪神』を1から書き直すことにしました。

とりあえず二章が終わってから一週間掛けてジックリと直していく所存です。

まあ、長話は何なんでここらで失礼させていただきます。

ではまた次回！

… 8 ありがとう(前書き)

なんかイマイチ最後が決まらなかったな……

… 8 ありがとう

「朝麻貴……」

オレはリフアーを軸にしてゆっくりと体の向きを変える。

オレの後ろには、息を切らせた朝麻貴がいた。

どうやら必死に走ってきたみたいだ。

……そこまでして、オレを止めようとしてくれるのか、お前は。

その事実だけで、不覚にもオレは自主退学について悩んでしまった。

……けどオレの思いはヤツパリ変わらない。

「朝麻貴、何度も言うがオレは……」

「隴火君！！まずは私の話を聞いて！！」

オレは驚いた。

あの朝麻貴が怒鳴ったのだ。

とりあえずオレは朝麻貴に話の続きを言わせる。

「……隴火君、アナタは勘違いしてる。

アナタはクラスのみんなが隴火君を邪魔だと思っているみたいだけれども、本当はそれは反対なのよ？」

「……ハアっ？」

いつでも冷静なオレが思わず驚いてしまった。

だって今までやってきたオレの非行を見てそんな事を言う奴はいないだろう。

「……それは確かにそうよ。

でもね……アナタはそれ以上に『私達を助けてくれた』でしょう？」

「……………」

オレは何も言えなかった。

そういえば、確かにオレはいろんなことをして来た。イジメの相談や力仕事に構内清掃と唯一貴秀の奴らが追いつけないくらい得意な世界史と日本史を教えてやったりした。

だけど、

「じゃあ、昼間の消えるコールは何だったんだよ？」

朝麻貴の言うことが正しいならそれは矛盾している。

昼間にオレは朝麻貴と武崎を除いた全クラスメートから『消えるコール』されたんだぞ？

「そう、そこなの。」

「……………はあ？」

「いい、隴火君？」

「な、何だよ？」

朝麻貴が今まさに確信を突こうとしてるのを感じ、オレは一步後ろに引き下がってしまった。

そして朝麻貴は言った。

「……………多分、集団催眠か何かよ……………」

「ッー!!」

オレは激しい動揺の中、持ち前の冷静スキルを総動員して考えを振り絞る。

そして気づいた。

昨日の昼間、リファーに会う前に瞬殺した背の高い守護者……確かアイツは、幻術使いだった。

「……隴火君、分かった？」

つまり隴火君は、敵に嵌められたらつて事になるのよ?」

朝麻貴は心配そうな顔をしてオレを覗き込む。

それに対してオレは、

「ははは……何だよそのオチ」

突きつけられたら現実にただ呆然としていた。

ハア、今回はタイミングが悪いことも重なってるな。

オレは結局、徐々に高まっていった悪神の悪意に気づかず平気でクラスメイトをクズ呼ばわりした。

……普段のオレなら悪事を犯した奴以外にはそんな事は絶対言わないのに、

オレの悪意のせいで徐々に周りも染まっていったと言っわけか……

「……けどね、大丈夫なのよ、隴火君。」

「……何だよ?」

朝麻貴、お前は優しいからオレを慰めてくれるんだろうけど、今は……

「違う。私が言いたいのはそういうことじゃない。」

「……じゃあ何だよ?」

オレは朝麻貴の言葉を待った。

……せっかくだし、ほんの少しの期待をして聞こう。

朝麻貴は一回深く深呼吸をした。

そしてこう言った……

「……昼間の事、みんな覚えていないのよ?」

……………えっ？

誰も……………覚えていない？

「……………うん。」

隼火君が出て行った後、私と武崎君でみんなにあの事を黙って貰おうと説得しようとしたの。

そしたら皆こう言ったのよ？

『隼火？アイツ今日来てたっけ？』……………てね。」

えーと、それはつまり……………

「……………あなたは今まで通りに学校に通えるのよ？」

朝麻貴は嬉しそうにオレに言う。

そして……………

「だから隼火君、学校をやめないで……………

私はアナタともっとお話がしたい。

もっと仲良くなりたい。

もっと……………一緒にいたい。

……………だから、」

朝麻貴はオレの手を握りしめ、自分の胸に置き、上目遣いでオレを見つめて、

「……………学校、やめないで……………」

オレの意志を挫く言葉を言う。

全く、朝麻貴。お前は卑怯だぜ？

そんなカワイイ顔して悲しそうな表情するなよ。
……惚れちまうだろうが。

「確かに、誰も覚えてないなら学校に行ってもいいかもな。
……この身長はどうともならないがな」
「そんな事は私と武崎君で何とかしてみせるわ。
だから、お願い……!!」

朝麻貴はオレの手を握りしめたまま瞳を閉じて懇願する。
全く、素直にカワイイ奴だぜ。

お前は何度オレに『全く』を言わせるつもりなんだ？
何よりお前はな、

「お前は優しすぎるな、朝麻貴。」
「そっそんな事なっ……」

朝麻貴が何かを言おうとしたがオレはそれをやめさせた。
具体的には、神力を一瞬だけ解放して体についた血を素早く消し
て、朝麻貴のその華奢な体をオレの胸辺りで抱き締めただけだ。

「お、臙火君？」

「朝麻貴、本当にありがとうな。今までオレを助けてくれて。」

オレは今まで朝麻貴に助けられてきた。
これからも一緒にいたいとおレも思ってる。

……だから、

「さよなら」

「……えっ？」

朝麻貴はその言葉に驚いた顔をしたがそれも一瞬だった。

次の瞬間にはオレのチョップが朝麻貴の首筋に入り、彼女は緩やかにオレに体重を掛けてきた。

オレはそれを受け止め、静かに抱きかかえてリファアーに近寄る。

「リファアー、コイツの家……分かるよな？」

リファアーは黙った頷く。

「命令だ。コイツを家まで送ってくれ。」

リファアーは頷きはしたが、怪訝そうな眼差しは変えない。

「ねえ、レン？アナタ……もう戻らないの？」

「戻らないじゃねー、戻れねーだけだ……」

朝麻貴をリファアーに託し、オレは神刀を肩に担ぐ。

そして、朝麻貴の安らかな寝顔を見つめる。

自然とオレの顔には笑みがこぼれていた。

「オレと一緒にいたら、コイツは絶対にまた巻き込まれる。オレはそんな事はしたくねー。」

「……だから、オレはコイツから離れなきゃならない。」

「いや、誰とも関わっちゃならない。」

「……」

リファアーは黙って聞いている。

お喋りなコイツでもオレの事を察してくれているみたいだ。
ハッキリ言って、助かるぜ。

「レン、一つ大切な事を言うわよ?」

リファアは今、まさに駆け出そうとしている体勢でこう呟いた。

「私は生涯アナタの味方だからね。」

そういい残すとオレの表情を見ずに赤く染まってきた住宅街に消えていった。

「ふっ」

何でだかな。アイツを見てると自然と笑みがこぼれるんだよな。

「……ありがとうな」

リファアは多分言っていた通りに一生オレのそばにいてくれるだろう。

アイツは多分……いや、絶対にオレから離れねーな。
そんなリファアもいいけど、

「朝麻貴、お前に出会えて良かったぜ。」

ほんの僅か2ヶ月だったが、いつでもオレを助けてくれたアイツも、オレにとっては大切な奴だった。

……だからオレはこう言っただ。
二度と会わないからこそ、オレは言うんだ。

「ありがとう……」

リファアが走り去った道にそう呟き、オレは振り返って再び歩き出す。

既に太陽は登り始めている。

「全く、綺麗すぎてムカついてくるぜチクシヨウ。」

オレの悪態は相変わらずだ。

そう、決めたんだ。リファアと契約したあの時に。

「オレは悪神・朧火蓮」

朝日に染まる住宅街を歩きながら、静かに微笑む。

「全ての悪は、オレが潰してやる。」

『悪を潰して更生させる』神。

それが今日からのオレだ。」

オレは軽く笑いながら廃ビルに帰る。

明日から忙しくなりそうだぜ。

… 8 ありがとう(後書き)

二章完結

次回からの三章はギャグが一杯、新キャラクター一杯でお送りします!!

ではまたいつの日か

三章〈神は始める〉（前書き）

閑話です

特に意味はありません

三章〈神は始める〉

「イヤアアアア！！誰か助けてえええ！！」

とある繁華街の人気のない裏道で響き渡る悲鳴。

そこには背後を壁で囲まれ退路を失いつい追いつめられた少女がいた。

「ひひひっ、諦めなあ姉ちゃんよお。」

そしてその女性を取り囲む3人の男。

男たちの手にはそれぞれ形は違うが鋭利なナイフが持たれていた。

この状況を見れば、次はこの少女がどうなるかは想像がつくだろう。

「イヤ……お願い、助けてえ……」

状況が分かかってしまうからこそ少女は助けを求めてしまう。

勿論、男たちの答えは、

「ダメなんだよねえ、それがな！！」

おれ達はお前を殺せって言われてんだよ。

んだからさあ……」

男たちはそれぞれのナイフを持ち上げる。

ナイフの向かう先は少女の首筋だ。

少女は分かってしまった。

『自分は殺される』と……

だから少女は助けを求めた。

「誰か……」

男たちがニヤリと怪しい笑みを浮かべる。
今まさに少女の命は奪われる瞬間だった。

「楽しいスプラッタに協力しやがれえええ!!」

もはや言っている事すら不安定な男たちのナイフが振り下ろされた。

少女は泣き叫んだ。

「誰か助けてええええええええええええ!!!!」

だが世の中そんなに甘くない。

例え誰かこの光景を見ていたとしても、誰一人駆けつける人なんていない。

……勿論、『人』ならばの話だ。

「言われて飛び出てじゃじゃじゃーん」

突如聞こえてきたやる気の無さそうな気だるい低めの声と、ゴリツと男たちの内の一人の顔面にかなり深めに決まった跳び蹴りの音が響き渡る。

そのまま男たちは一人に巻き込まれて3人とも5mぐらい滞空し

て地面に打ちつけられる。

「全く、こんなたいけな少女を襲うなんてふてー奴らだなあ、ア
ン？」

突如現れた人物に少女は目を奪われた。

その人物は色褪せた水色の浴衣に薄い焦げ茶色の羽織りを纏った
大柄な男性だった。

そして何よりも目を引くのがその髪だった。

男性の前髪はもはや両目を隠し、口に入るぐらいに長く、もみ上
げは骨盤まで届き、後ろ髪は180はあるう男性のくるぶしまで届
き、地面を少し撫でているぐらいの長髪だったのだ。

「ああ、前髪が鬱陶しいしいな。」

その男性は前髪に軽く手を触れた。

だがそれだけで男性の前髪はバサバサと落ち、長さは変わらない
がシャギーがより多く、深くなり前髪から目と顔が分かるようにな
った。

そして少女は絶句した。

『かつこいい……』

その男性の露わになった顔は、とても凛々しかった。まるでナ
イフのように鋭いが決して小さくはない力強い眼に細く整った眉、
艶のある健康的な肌への字で結んだ唇の全てが男らしかった。

少女は見とれていた。始めてと言っていていいぐらいの男らしさに溢
れた男に出会って。

だが勿論、そんな状況は長く続かない。

「んだゴルアテメエエエ！せつかくのスプラッタの時間を邪魔しやがってえ！！」

「挽き肉にしてミンチにしてフライドチキンにしてスパゲティにしてやるうか！？」

「FとUにCを足してKの集合体なんですかあ、このF U K野郎！！」

もはや支離滅裂だが突如現れた男性に怒鳴りつける男たち。けれど男性は、

「とりあえずその麻薬中毒者。訳してヤマチュウ……何か誰かのあだ名みたいだな……」

撤回だ、『ヤクチュウ』共。テメーら自分の行いを反省しやがれ。今なら1日だけにしてやるぞ？」

そう人差し指を突きつけゴミを見るような目つきで見下した。それに対して男たちは、

「F U K YOU！！！！」

「死にさらしちゃって下さいませ御囚人様アア！！」

「すかしてんじゃねえぞこのナルシの塊がアア！！！！」

規制されかねない暴言を発しながらナイフを持って突っ込んできた。

その瞬間、ブチンと血管が切れるような音がした。

「……7日だ」

不意に男性が腰を落とし、羽織りの内側に右手を添える。

「レン、終わっちゃった？」

すると男性の背後からいきなり小さな少女が現れ、後ろから男性の首に手を回し、足を腹あたりで交差するようにして抱きついた。

「おう、今終わった所だ」

それに対して男性は少女が背中に張り付いてるのにも構わずに談話を始めた。

「それにしても、レンの髪伸びたね」

「全くだぜ。鬱陶しいったらありやしね」

「たった一日中悪神化してただけでここまで髪の毛が伸びるなんて、予想外だよ」

「この髪バツサリ切り落としていいか？」

「ダメだよレン！せつかくレンは通常の神よりも神力が高すぎるくらい高いんだからその髪の毛を利用しなきゃ勿体ないよ！」

「はいはい……まあ、悪神化ぐらいは解いていいだろ？」

「うん、別にいいよ？」

「……相変わらず軽いな……」

そう言っつて少年は右手で後ろ髪を静かに払った。

すると先程かかとまであった漆黒の髪が一瞬で消え、代わりに夕陽のような真っ赤で鮮やかなツンツンと立てられた髪が現れた。

それだけではない。

今の一瞬で少年から感じていた威圧感や神々しさもなくなった。

「うん、やっぱりこっちの方がいいな」

「え、アタシ的にはレンは長髪バージョンの方がいいのにな」

「それはお前の意見だ。オレ自身はこんぐらいの長さが一番なんだ」

男性はそう言いながら少女を引き剥がした。

少女は顔を膨らまして拗ねているが男性は気にしていない。

「てかりファー、今何時だ？」

「え、面倒くさいよ」

「いいから速くしてくれ……」

「はいはい、仕方ないな、ちょっと待ってね……ってあれ？」

「……えっ？」

「……」

「……」

「……リファー、お前……まさか……」

二人の会話が止まり、少女に注目が集まる。

そして注目の的は頭に右手の拳を軽くぶつけ、舌を出して「ういっ」

「忘れちゃった、テへ」

「……」

その次の瞬間にはゴスツツとかなり危ない音がして少女の頭にチヨップが食い込んだ。

「ちよつとレン！！舌噛んじゃったじゃないの！！！！」

「テムエエエは何をやらかしょんじゃゴルアアア！？オレを待ち合わせに遅れさせる気かアアン?!」

「てゆうーかレンが自分で持つてれば良かったじゃないのかなあ！！
そうすればわざわざアタシに確認しなくても良かったはずなのにね
！！」

「お前はオレの守護者だろうが！？だったらお前に任せるのは妥当
だろうが！！」

「ふん！！その守護者に69回もジャンケンに負けてカットヨツチ
ヤン買わされてるご主人様にそんな事言われたくないなアタシは
！！」

「アアン！！？テメエマジでシバくぞこのチビが！！」

「ハア！！？元身長159cmのアナタには言われたくないわよ！
！！」

「はい！！地獄行き決定だこのポケエ！！一年間、更生ランドでた
っぷりと精神を養いやがれ！！」

「ポケエ！？アナタアナタをポケって言ったわね！？……いいわ
よ、全力でかかってきなさい！！」

突如再び少年の髪が紅蓮から漆黒になりくるぶしまで伸びたと思
つたら少年は帯の長ドスに居合い切りの容量で手をかける。

対する少女はいつの間にか自分の身長のご二倍は軽く越しそうなく
らいの大刀を上段で構えていた。

それを黙って見ていた先程襲われていた少女は慌てて二人の間に
入る。

「ちょっと、何やってるのよ！？危ないじゃない！！！！」

突然仲裁に現れた少女に二人は驚いていたが二人とも一瞬で焦っ
た表情になり少女に詰め寄った。

「ねえ、今何時何分何秒!？」

「えっ?今は……23時56分」

「何秒!？」

「ええ!?!秒も言わなきゃダメなの!？」

とりあえず少女はきつちりと秒数まで教えると男性たちは「ありがとう」と言うと走り去ろうとしていた。だがそれを少女は呼び止める。

「何かよつか?悪いが手短かに頼む」

「えーと……」

少女は一瞬悩んだような仕草を見せたが直ぐに決意を決めた眼差しで男性を見た。

「アナタたちの名前……何て言うの?」

いきなりすぎるその問いに男性は微笑んで答えた。

「朧火蓮(仮)だ」

「サリア・リフファープ・哀奈(仮)よ」

そう少女に告げるといきなり二人の体が激しくブレて、いつの間にか二人はいなくなっていた。

「……何だったのかしらね……」

少女はそう呟き、しばらく人気のない裏道で立ち尽くしていた。

三章〈神は始める〉（後書き）

次回いよいよシャハナの気になる返事が……！！

シャハナはどう答えるんでしょうね？

… 2 シャハナの思い

「よう、結論はついたか？」

時間は11時59分。

約束の時間ギリギリだがオレたちはアジトである廃ビルの屋上にたどり着いた。そこには、真っ白な袴を纏った姿で目を閉じて正座をしているシャハナがいた。

「お待ちしていました、悪神様」

ゆっくりと瞼を開き、オレを見つめる。

そしてまた目をつむり、三つ指を立てて正座のまま前屈みなる。

それが意味することは……

「……提案を蹴るって事か」

シャハナは頭を下げたまま動かない。

オレはあえて何もいわずにシャハナの出方を窺う。

……シャハナが頭を下げて約二分。

遂に沈黙が破られた。

「悪神様……私はあなた様について行くことが出来ません……」

頭を上げた時に見えたシャハナの顔は、涙で塗れていた……

「申し訳ございません……、本当に申し訳ございません…… 守護者は主たる神に逆らえないのです……！！！」

闇夜に包まれたビルの屋上で響くすすり泣き。

一人、自らの罪悪感に駆られる少女は苦しみ、涙を流していた。

「私が今日、ここに来た理由……、一つはアナタの誘いを断ること、もう一つは……」

シャハナはそついい、脇に置いてある日本刀を素早く抜刀して中段で構える。

「悪神様……アナタのお命を頂戴するよう命令されたからです……！！！」

その間も、シャハナの目からは涙がこぼれ落ちている。

それを見てオレは何故か心を締め付けられるような気分になった。

……コイツは今、メチャクチャ辛いんだろうな……

「悪神様、一つお願いがあるのですが……お聞き願えませんか？」

シャハナの必死の目を見て、オレは黙って頷く。

そうすると彼女は涙を流しながら切っ先を少し落としたり。

「私を……あなた様の手で殺めて下さいませんか？」

……どうしてだろうな？

こんなバカげた状況の中でも、オレってば心一つづいてねーよ。

「私には、あなた様を殺す気はございません。しかし、私には主に逆らうことも、自刃する事も出来ないのです。」

悲痛の表情でシャハナは次々と言葉を告げる。

だがシャハナは不意に自らの胸に手を当てて、静かに微笑んだ。

「けれど、あなた様に殺めてもらえれば良いのです。あなた様は私を二度も助けてくださいました……、私はあなた様の手で終わらせて貰いたいのです」

なあ、シャハナ？

どうしてこんな時だけお前はそんな嬉しそうな顔するんだよ？

『自分を殺してください』って……
そんな悲しいこと、笑顔でいうんじゃないよ……

「どうしても主には逆らえないのか？」

「……はい」

「どうしても、オレの守護者にはなれないのか？」

「……はい」

「……どうしても、殺し合わなきゃならないのか？」

「……」

最後の問いに、返事は返って来なかった。

返って来たのは、ガチャガチャと刀の震える音と、スンスンと聞こえる嗚咽の音だった。

もう、それだけで充分だった。

これからオレがしなければいけないことは……

「シャハナ、オレからも頼みがある」

シャハナが俯いた状態からゆっくりと顔を上げる。
それを見ながら、オレもゆっくりと罪刀の柄を握り締め、

「本気でできてくれねーか？」

ゆっくりと刀を抜く。

そして露わになった『神刀・白闇の罪刀』から太陽のように眩い光が発せられ、闇夜の屋上を照らす。

オレはその光る白刃を力を圧縮して形を整える。

それにより、シャハナの表情を伺うことが出来た。

白光の中見えなかった彼女の表情は、驚きで満ちている。

「どうして……その様な事を仰るのですか？」

驚きながら二、三步引き下がる彼女。

それを冷ややかな目で見て、刀を肩に担ぐ。

そして、シャハナの目をしっかりと見定めて言った。

「オレのそばを許した奴の実力を知りたくてな」

「……！」

シャハナが急に刀を取り落とし、膝を付つ。

一瞬、どうしたのかと気になったがすぐにそんな考えはなくなつた。

なぜなら、

「本当に、あなた様の従者になりたかったな……」

辛そうな笑顔でオレを見つめるシャハナ。

その笑顔を見ただけで、胸が押しつぶされそうになり、そんな事を考えてる余裕がなくなった。

けれど、不意に考えてしまっただ。

シャハナがいたら、どんな生活になってただろうかを。

……けど、

「……考えてても仕方ねーんだよな」

肩に担いだ刀の切っ先をシャハナに向ける。

当然、シャハナも反応して彼女も自分の日本刀を手取る。

その様子を見て何故かホツとしてしまう自分に妙なものを感じながらシャハナに告げる。

「シャハナ、構えな」

首まで届く長つたらしい前髪を書き上げて、振袖状の羽織りの懐にあるカチューシャで前髪を留める。

シャハナはその間に立ち上がり、再び刀を中段で構えていた。

「腹あ、括ったか？」

「ええ、仰られた通りに全力で参りますよ」

「ハツ、上等だ」

ジリジリとお互いの距離をにじり寄せながら出方を窺う。
シャハナは両手で持った日本刀に神経を尖らせているように見える。

……オレ、片手でしかもナイフの構えだけど大丈夫かな？

ああ、そうだ

「リファー、結界頼む」

「了を解しましたマスター!!!」

「いちいち分かりにくい返事をすんな!!!」

シャハナから目を背けずに藍髪チビを怒鳴りつけると一瞬で周りの色がモノクロと化した。

「……シャハナ、いくぞ」

「……はい」

モノクロの世界が月の光を消した瞬間、オレ達は駆け出した。

お互いに向かって全力で、
全力でお互いの獲物を振り落とす。

- - ガキイイイイッツツツ!!

激しい金属の擦れ合う音とともに、オレとシャハナの真剣勝負は
始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3032u/>

悪神【悪を称する正義】

2012年1月4日01時45分発行